

第 24 回

さんりく・おおふなと

お話大賞作品集

大船渡市立中央公民館



はじめに

お話大賞も二十四回目を迎えることが出来ました。もしかすると、皆さんのお父さん、お母さんも小中学生の頃にこのお話大賞に作品を応募していたかもしれないほどの歳月を続けて発刊出来ましたことを嬉しく思います。

このお話大賞の目的には、皆さんにもっと本に親しんでいただきたいという思いも込められております。本を読むということは、自分の知識や言葉の世界を広げることになり、さらには自分の言葉で、自分にしか書けない世界で一つだけのお話を書くことに繋がるのではないのでしょうか。

今年度も個性豊かな三十三作品の応募があり、心温まるお話や、奇想天外なお話など、作者が今、その時にしか書けないであろうお話が沢山ありました。応募された皆さんには何年か経って、自分の作品を読み返し昔の自分を懐かしく想っていただき、偶然この本を手にして読んでいただいた皆さんには、この時代に想いを馳せながら読んでいただきたいと思います。

『さんりく・おおふなとお話大賞』は、皆さんの未来の子どもや孫へと時が移り変わっても脈々と受け継がれていく事業であり続けて欲しいと願っております。

結びに、この作品集の発刊にあたり、審査をされた先生方、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者や多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

大船渡市教育委員会

教育長 今野 洋 二

講 評

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員長

熊谷 勵

「さんりく・おおふなとお話大賞」としては3回目を迎えました。が、「さんりくのお話大賞」から数えると、今年度は24回目を迎えました。市内の小・中学生から一般まで33点と、昨年を上回る応募に深く感謝を申し上げます。特に今年度は、高校生の応募が5年ぶりで、2点の応募は第1回から数えて3回目となりました。高校生が興味を示してくれましたことにも、お礼を申し上げます。

今年度の作品で特徴的なことは、津波に関する内容が3分の1程度を占めたことです。その作品も、昨年度までは悲しく辛い話題が多かったのですが、震災に対する復興や教訓を内容にした前向きで明るいものになりました。

さて、審査にあたりましては、①テーマが独創的で発想が豊かであるか。②初め・中・終わりなどの構成が工夫されているか。③読み手に分かりやすく目に浮かぶような書き方になっているか。④大船渡の郷土の理解や愛情が感じられる作品か。⑤総合的に見て素晴らしい作品であるか。の5つの観点で、4名の審査員が行いました。

その結果、いずれの作品も郷土への愛情や理解が感じられ、発想豊かで想像力や説得力があり、甲乙つけがたいレベルの高い作品ばかりで、審査員を悩ませることになりました。入賞されました8名の皆さん、大変おめでとうございます。その中でも、昨年度に引き続き小学生高学年から「大賞」が生まれましたことを嬉しく思います。

また、昨年度の大賞作品「震災をのりこえたヤドカリたち」を脚本化して、6年生が学習発表会で演じた越喜来小学校の取り組みは、この「さんりく・おおふなとお話大賞」に大きな夢と希望を与えてくれました。皆さん、来年もまた、素晴らしいたくさん作品をお待ちし

ています。

☆大賞

◇越喜来小学校6年 大津 暖さんの

「越喜来出身のぼくの幸せ」

震災で両親を失い、絶望のどん底から救ってくれた義父と義母から、当たり前だと思っていた父母のありがたみを今更ながら気づかせられる。すばらしい出足の構成です。弟ができる喜びから、弟ができて生活が一変する。そして、そのさみしさから弟の存在を憎む。しかし、弟の病気を知って今までの自分の考え方を後悔し、病気を治すための行動。この一連の心の動き、いわゆる心理描写に大変優れた作品です。また、大王杉までの道のりと病気悪化に対する不安の大きさの関係、最後の『その瞬間、弟の口が動いた。ぼくにはそれが、「お兄ちゃん、ありがとう」に見えた。』など、全体的に素晴らしい表現力です。起承転結の構成にも優れ、『考える力』がきちんと身についています。

☆小学生低学年部門〈奨励賞〉

◇綾里小学校1年 岩淵 眞歩さんの

「あやちゃんとかいくんのふしぎなぼうけん」

まず、一年生でありながら、かなり長い文章を書いたことに感心しました。そして、カボチャの汽車で動物の世界に行き、いろいろな動物と遊園地で遊んだり、温泉に入ったりレストランでごちそうを食べたり、夢のような楽しいまるでファンタジーの世界に入り込んだような作品です。それが、「七色の線路」や「線路は光っているけど人間には見えません」など絵本のような書き方は、最後の文章「ふたりは、ゆめをみていたのです。」とよくかみ合っています。

◇越喜来小学校2年 畑野 寧音さんの

「友だちになつて」

一人ぼつちでさみしい熊は、友達が欲しくてたまりません。そのために、足を滑らせたシカを助けたり、風船やボールを取ってあげたり、火を消すために協力したりしました。優しい心で人助けをすると、たくさん友達ができることが分かりましたね。大船渡の地名がたくさん出て、ほほえましい作品です。学校でも、困ったことをそのままにしておかないで、解決するために考えて行動することの大切さを教えてくれました。

☆小学生高学年部門〈奨励賞〉

◇越喜来小学校4年 田端 里帆さんの

「木の気持ち」

震災から3年以上が経過し、音楽の先生やピアノ職人の協力、犬からの勇気や古ぼけた木の応援など、みんなで手を取り合いながら幸せに向かつていく作品です。また、「木の会議」や「木に日本語で話しかける」などの発想が豊かで、息を切らす「ハア、ハア。」に周りの木々が返事をする「ボソツ、ボソボソツ。」のリズム感あふれる表現力にも優れています。主題である『木の気持ち』が、ピアノコンサートの開催や犬小屋の建築によく表われています。

◇大船渡北小学校6年 木下 愛友さんの

「震災が伝えたこと」

震災といじめを通してながら、現代に通用する人間の生き方を教えてくれた作品です。いじめの内容や意地悪された心情が、仲良しだった友達の転校と担任の先生の励ましからよく伝わってきます。また、担任の先生を奪った三月十一日の様子が目に浮かぶような書き方で、身近で触れたことのなかった『人の死』を経験しています。その教訓として、「人の命の尊さ」と「今あることを大切に」しながら、将来の夢

で結んでいるまとめ方の素晴らしい作品です。

☆中学生部門〈奨励賞〉

◇越喜来中学校2年 大津 希梨さんの

「本当に大事な物」

文章全体に倒置法を用い、筋が通っていて説得力のある優れた作品です。「先生」と例えた大王杉の書き出しと文末の工夫、交換日記の三日目の展開など、納得させられる結論にも構成力や表現力の高さがにじみ出ています。姉妹を比較した心理状態が手に取るようで、失つてみて姉の値打ちが分かり、「大切な命」「大事なもの」をつかむための心の揺れが成長につながり、大きく主題に迫っています。中学生としては大変素晴らしい自己啓発の作品です。

☆高校生部門〈奨励賞〉

◇高田高等学校1年 熊谷 俊亮さんの

「三月十一日への想い」

3週間も父母の行方が分からない中で、兄と妹が「分かればよし、きつと大丈夫。」と励まし合いながら、震災の恐怖を乗り越えようとしている兄妹愛ほほえましい作品です。そんな中で、寄り添ってくれる「海の恵み」と、人に牙を向ける「海の恐怖」をばあちゃんの笑顔から学び、復興に取り組む明るく勇気が出る内容で、主題の「三月十一日への想い」が伝わってきます。

☆一般部門〈奨励賞〉

◇中村 祥子さんの

「ドンドコドの星の海」

構成がはつきりして流れがよく、幼子と母親との関わりがいかにか強いのか、それが祖母の排斥にまで発展し、父親のおどした娘に対する対応とを比較させた素晴らしい内容です。また、「海からたくさんの星が生まれて」「魚のお祭り」など、夢がどんどん広がリメルヘンの世界

に吸い込まれていくような作品です。随所に擬音語が登場し、表情や行動までが目に浮かぶような書き方で、表現力に大変優れた作品です。

目次

発刊の言葉

大船渡市教育委員会教育長

今野 洋二

講評

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員長

熊谷 勵

大賞

越喜来出身のぼくの幸せ

越喜来小学校 六年 大津 暖 …… 1

奨励賞

【小学生低学年部門】

あやちゃんとかいくんのふしぎなぼうけん
友だちになって

綾里小学校 一年 岩 渕 眞 歩 …… 4
越喜来小学校 二年 畑 野 寧 音 …… 8

【小学生高学年部門】

木の気持ち
震災が伝えたこと

越喜来小学校 四年 田 端 里 帆 …… 11
大船渡北小学校 六年 木 下 愛 友 …… 15

【中学生部門】

本当に大事な物

越喜来中学校 二年 大 津 希 梨 …… 18

【高校生部門】

三月十一日への想い

高 田 高 校 一年 熊 谷 俊 亮 …… 22

【一般部門】

ドンドコドの星の海

中 村 祥 子 …… 26

☆ 作 品 集 ☆

《小学生低学年部門》

ふ し ぎ

いじわるくんとおこるちゃん

べんきようがきらいなみおちゃん

およげないたくくん

カニがいつぱい

あわびとおじいさん

は る ゆ き

ぐ う た ろ う

大きなつなみ

《小学生高学年部門》

カンナとりゆう

ひろしの魚嫌い

ヒマワリがくれた夏

海の神の伝説

きれいな海を取り戻した姫と王子

末崎小学校 二年 大和田 ひなの…… 33

吉浜小学校 二年 岡崎 憂姫…… 34

吉浜小学校 二年 庄 司 美 櫻…… 35

吉浜小学校 二年 白木澤 龍 真…… 36

吉浜小学校 二年 浅 沼 俊 哉…… 37

吉浜小学校 二年 加 藤 志 …… 38

吉浜小学校 二年 佐 藤 春 幸…… 38

吉浜小学校 二年 小 松 星 河…… 39

吉浜小学校 二年 佐 藤 類 …… 40

末崎小学校 五年 小 松 真 菜…… 41

越喜来小学校 五年 富 澤 舜 基…… 43

越喜来小学校 五年 神 津 凜 …… 45

越喜来小学校 六年 三 浦 環 …… 49

越喜来小学校 六年 岡 澤 風 華…… 52

あの日の想い

盛小学校 六年 新沼由唯…… 54

アイナメ兄弟のすえっこの話

大船渡北小学校 六年 浦島帆乃佳…… 58

《中学生部門》

いちばん大好きな街

越喜来中学校 一年 大上萌衣…… 60

どのような国が栄えるのか？

越喜来中学校 一年 窪田創…… 63

夏の思い出

越喜来中学校 一年 畑中春薫…… 65

ふしぎな冒険

越喜来中学校 一年 平田涼介…… 68

サンリク中学校の怪談

越喜来中学校 二年 三浦まとい…… 71

ぼくの夢

越喜来中学校 二年 菊地南美…… 74

《高校生部門》

空へ跳ぶ

大船渡高校 一年 柏崎美結…… 76

《一般》

椿の中で

村上真紀子…… 80

黄水仙

千葉恵保子…… 85

大賞

越喜来出身のぼくの幸せ

越喜来小学校六年 大津 暖

三月十一日、二時四十六分、大きな津波はぼくの母と父、そしてぼくの住んでいた越喜来の町を、一瞬の間に消し去った。ぼくは、その日のことをずっと覚えていいる。自分の家は高台にあり、流されずにすんだ。でも、父と母が仕事をしている場所は、海からとても近いところにあり、すぐ逃げる必要があった。きつとあの日、地震が起きて落ちた機材などを片付けていた所を、津波にまきこまれてしまったのだろう。ぼくの家族が、誰一人としていなくなってしまった。何の前ぶれもなく起きた悲しい現実には、ぼくはどうすることもできず、ただそう失感で埋め尽くされているだけだった。今でもあの事を思い出すと、なみだがあふれて止まらなくなる。

今、ぼくは、遠い親せきで、ぼくの義父、義母になつてくれた人と一緒に住んでいる。越喜来から遠く離れた町で暮らしている。義父と義母には子どもがいない。だから、ぼくの事をかわいがってくれ、実の子ど

ものように扱ってくれた。お父さんは宿題を教えたり、遠くまでお出かけに連れて行ってくれたりした。お母さんは、毎日美味しいご飯を作ってくれて、洗たくや食器洗いはぼくの分までいやな顔一つ見せずに、ニコニコと笑顔でしてくれた。実の母が毎日してくれていたことだったが、その時はやってもらうのが当たり前だったため、ありがたいとは思わなかった。今日もまた、お母さんの作るとても美味しいご飯を、三人で仲良く食べている時、お父さんからとてもうれしい発表があった。

「あのな、あと一ヶ月先の話なんだが、お前に弟ができるぞ。親せきの一才になる男の子なんだが、両親を事故で亡くし、面倒を見ていた祖父母も病気がちで世話ができなくなったから、この家で預かることにした。兄弟だ。仲良くするんだぞ。」

ぼくは、うれしくてたまらなかった。

「ぼくの弟がくる。お兄ちゃんって呼ばれる。」

ぼくは、前から兄弟がほしかった。九つも離れているけど、いっぱいいろんな事をして遊びたいな。ぼくは、それから毎日がますます楽しくなった。弟が来るまで、あと何日と指を数えて待った。

そして、待ちに待った日がやってきた。その日は、

いつもより少し早く起きた。そして、朝ご飯を食べると、父と母が迎えに行く準備をして言った。

「それじゃあ、お父さんとお母さんは迎えに行くから留守番していてね。」

ぼくはその数時間をとでもわくわくしながら待った。弟がいるってどんな感じだろうと考えると、顔がほころんでくる。

弟を連れた父と母が帰ってきたのは、二時間後。弟は母の背中でごつすりと寝ていた。父は持つてきた弟の荷物を片付けに行き、母は弟を背中から下ろして、だっこした。ぼくは、弟をおこさないように小声で言った。

「ぼくがお兄ちゃんだよ。いっぱいお話・」

「はいはい」

ぼくが語りかけた言葉を最後まで聞かずに、母が言った。まるで、ぼくの言葉をばかにしているように聞こえた。でもその時は、忙しかったのだろうと考えた。

しかし、弟が来てから、ぼくの生活はすっかり変わってしまった。家族三人で仲良く食事していたのに、父と母は弟ばかり世話をして、ぼくにはまったく構わなくなった。ぼくは、テーブルのはじめで黙々と一人で食事するようになった。美味しいはずの食事も、一人だと、食べ物の味もよく分からず、味気なかった。と

てもさみしかった。それからも二人は、弟ばかり大切に、ぼくにはとても冷たくなった。ぼくが弟をなでることも、許してはくれなかった。ぼくは、一人で夜中に泣いた。朝になって鏡を見ると、夜に泣いたせいで、まぶたがはれていた。それに気付いた母が言った。

「あれ、何でそんなにはれているの。」

ぼくは本当の事を言えず、適当に津波の事を思い出したなどと、うそをついた。母は、

「ああ、そう。でもしゃべっているひまはないわ。今日は、この子の診察に行かなきゃいけないの。」

ああ、思っていた通りの反応だ。ぼくが言っていた言葉の真逆。「大丈夫。」この言葉を言って欲しかったのに。「ああ、そう。」という冷たい言葉が、ずっと頭の中を回っている。

そうこう考えているうちに、父と母が玄関にいた。「それじゃあ、行ってくるから、留守番お願い。何かあったら、すぐ、電話するね。」

そう言うと、玄関をボタンと閉め、すぐに行ってしまった。ぼくは、一人家で過ごした。弟が来なければ、こんな風にさみしい思いをしなかったはずなのに。

「弟なんか、来なけりゃよかったのになあ。」

心で思っていた事が、口からつい出てしまった。両親

に聞かれなくてよかった。

その時、プルルル。プルルルと電話が鳴った。ぼくは母の言葉を思い出した。「何かあったら電話する」つまり、弟に何かあったんだ。ぼくは、急いで受話器を取った。相手は予想通り母だった。母は電話の向こうで泣いていた。

「どうしたの。お母さん。」

「お医者様の話では、弟は今まで見た事のない重い病気にかかっているそうなの。二ヶ月もたないって。この病気を治せるのは、大王杉の樹液だけだそうよ。大王杉の樹液は千年に一度しかでないし、どうすれば出せるかもよく分かっていないそうよ。だから、あの子の命は助からない。これから、お父さんとお母さんは病院でまだ話があるから、家にいてね。じゃあ。」

ガチャ。ああ、あの弟は病気だったのだ。ぼくが、なでることもさせてもらえなかったのは、きっと病気のせいだ。ああ、なんてぼくは自分の事ばかり考えていたのだろう。かわいそうな弟。ぼくは、受話器を置くと、すぐにリュックの中にビンとお金を入れて家を出た。そして三陸鉄道に乗って、ぼくの住んでいた越喜来を目指した。越喜来までの道のりはとても長く、長いほどに、弟の病気がますます悪くなりそうで、不安もどんどん大きくなっていった。そしてやっと越喜

来に着いた。ホームから見える大王杉。ぼくは樹液をとるための方法を、町長さんに聞くことにした。役場に向かい、町長さんに会った。

「あの、すみません。実は・・・」

ぼくは、今までの出来事を全て話した。優しい顔でぼくの話聞いてくれた町長さんは、

「優しいお兄さんだねえ。越喜来で生まれて育ったんだね。弟のためにも、君のためにも私は協力するよ。でも、大王杉の樹液は君の言った通り千年に一度しかでない。確実な方法はないんだ。」

「やつぱり、無理ですか。」

「君は意志が強くてとてもいい子だ。越喜来の子どもでもある。こうなったら、越喜来じゆうに放送しよう。」

越喜来の人に呼びかけて、みんなで大王杉にお願いしてみよう。ここで待っていないさい。」

町長さんはそう言うのと、放送室に向かって行ってしまった。

ぼくは、はあーとため息をついた。越喜来出身とはいえ、今は遠くに住んでいるぼくのために、人々が集まってくれるはずがないと思ったのだ。すると、町長さんを先頭に、たくさんの人がやってきた。それは、越喜来の町の人全員が、ぼくのために集まってくれたようだった。

「君のなくなったご両親は、本当に優しい人だったよ。勇気もあった。だから、君も弟のために、こんなに一生けん命になれるんだね。」

両親の話に、思わず涙がこぼれた。すると、町長さんが言った。

「さあ、お願いしよう。君の言う言葉にみんなが続くから、さあ。」

ぼくは、びんを持ちながら、大声で言った。

「大王杉、どうかぼくに樹液を下さい。お願いします。」
それに続いてみんなが言った。

「お願いします。」

それでも、何も起こらず、樹液も一滴も出なかった。ぼくは泣きながらあやまった。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ぼくが弟なんか来なけりやよかったなんて思ったから、いけないんだ。優しいお兄ちゃんじゃなかったから。」

ぼくが心からあやまったその瞬間、視界が金色の光でおおわれた。その光が消えたあと、びんの中を見てみると、ほんの少しの樹液が入っていた。ぼくは喜びで、今度はうれし涙がでた。

「みんな本当にありがとう。大王杉ありがとう。」

こうしてみんなにさよならを告げると、急いで病院に向かった。そして、すぐに樹液を飲ませた。そして、

再検査をしてもらった。その結果は、「異常なし」

病院の先生は、ぼくをととてもほめてくれた。そして、父と母も、

「今までごめんね。弟の病気が心配で、すっかり話も聞いてあげられなくて。迎えに行ったときに、病気のことを聞いたんだ。何とかしたくて、いろいろ相談したりして、忙しかったんだ。でも、助けてくれたのは、お兄ちゃんだったね。ありがとう。これからも、弟のことよろしくね。お兄ちゃん。」

「うん。」

その瞬間、弟の口が動いた。ぼくにはそれが、「お兄ちゃん、ありがとう」に見えた。

奨励賞

【小学生低学年部門】

あやちゃんとかいくんのふしぎなぼうけん

綾里小学校一年 岩渕 眞歩

4年生のあやちゃんと、2年生のかいくんはきょうだいです。

りょうり小学校からのかえりみち、あやちゃんとかいくんは、おうちにかえったらなにをするかをはなしていました。

「きょうは、なにしてあそぼうかな？あつ、そうだ！おままごととか、おにんぎょうさんであそびましょ。」

「えー。ぼくは、くるまとかしんかんさんであそびたいよー。しんかんせんは、かっこいいんだぞ！」

「それじゃあ、かいがえらんだやつとわたしがあえらんだやつであそんだらどう？」

「いいな。いいな。そうしよう。」

ふたりがおしゃべりしているわきを、うさぎがピョンピョンと、とびはねていきました。

うさぎは、

「ふう…まにあった…。ねぼうをしたけれどおきやくさんはまだきていないようだな。」

うさぎは、かぼちやのきしやのうんてんしゅさんだったのです！そのかぼちやのきしやは、2かいだてのきしやでした。きしやは、なないろのせんろをはします。せんろは、ひかっているけれど、にんげんにはみえません。そして、えきもあります。いきさきは、おきやくさんがいったところに、いけます。きつぷもおかねもいりません。ただ、おれいにおかしやおりがみをおったものをだせばいいのです。

そこに、ねこのミヤミちゃんがやってきてこういしました。

「わたしは、こうえんにいきたいわ。」

「はい。わかりました！おのりください。しゅっぱつしんこう！！」

そして、こうえんにつくと、きつねのコンキチくんがいました。

ミヤミちゃんとコンキチくんは、おにごっこや、ぶらんこであそびました。

しばらくして、コンキチくんが、あわてていいました。

「あ！ぼく、きつねのがっこうにいくのをわすれてた。もう、おんがくのじかんがはじまるよー。」

すると、かぼちやのきしやがとまり、うさぎのうんてんしゅさんが、

「わたしが、ちやうとつきゅうでおくっていつてあげます！しゅっぱつしんこう！！」

コンキチくんは、ミヤミちゃんにバイバイして、かぼちやのきしやにのりました。

「つきましたよ。きつねのがっこうへ。」

「え？ちがうよちがうよ。ぼくのがっこうはここじゃないよ。」

そこは、りょうり小学校のまえでした。

「あれ？へんだな。もしかして、にんげんのせかいにまよいこんだのかな？あつ、だれかきた。」

そこに、あるいてきたのは、あやちゃんとかいくんでした。ふたりのまえにきゅうにかぼちやのきしやがあらわれたので、ふたりはびつくりして、こえをそろえて、

「あれ？このきしやなんだろう。」
「いいました。」

「なんだかわかんないけど、のってみよう。」
と、かいくんがいました。

あやちゃんは、おうちのひとからいつも、知らないひとについていかなんだよ。といわれていたことをおもいだしたけども、かいくんがいうように、かぼちやのきしやにのってみたくまりました。

「お父さんに、知らない人についていくなよといわれていたけど：よし！かいがいったとおりにしてのってみようかな。」

あやちゃんとかいくんは、かぼちやのきしやにのりました。

「ところで、あなたたちはどこにいきたいのですか？わたしたちは、にんげんのせかいにまよいこんでしまったのです。」

あやちゃんとかいくんは、びつくりぎょうてんして

しまいました。でも、かいくんはおもしろそうだとおもってこいいいました。

「ぼくは、ちよこつとでもどうぶつのせかいにいつてみたいな。」

「うん！かいがいったとおりにどうぶつのせかいにいつてみよう！！」

と、あやちゃんがいました。

「でも、どうすればどうぶつのせかいにかえられるの？」
とかいくんがきました。

「みんな、よくわからないだろうけど、かぼちやのきしやはかえりみちがわかるんですよ。だって、このきしやにんげんのせかいにまよいこんでもはんどるをまわしただけでもとのどうぶつのせかいについているんですもの。」

それをきいたコンキチくんは、
「おくらてしまったけどつぎのじゅぎょうにはまにあうぞ。」

うさぎのうんでんしゅさんは、

「しゅっぱつしんこう！」

と、いうとかぼちやのきしやは、ほんとうに、どうぶつのせかいのコンキチくんのがっこうにつきました。

コンキチくんは、

「それじゃあ、いつてきまゝす！」

と、いいながらがつこうのなかにはいつていききました。

つぎにのってきたのは、とらのおやこと、3びきのくまのおねえさんたちでした。

とらのおやこは、ゆうえんちにいききたいといいました。そして、くまのおねえさんたちは、れすとらにつれてつてといいました。

ゆうえんちとれすとらは、つながっています。

「ぼくはじえつとこーすたーにのりたいたよう。」

と、とらのこどもがいうと、とらのお父さんが、

「お父さんは、じえつとこーすたーなんてこわくてこわくてめまいがするぞ。」

とらのおかあさんは、

「お父さんがいったとおりだよ。おかあさんも、じえつとこーすたーなんかにつたらめまいがして、たいへんなことがおきるわよ。」

と、いったけど、とらのこどもはのりたいたいのりたいたとさわいでいるので、とらのお父さんとおかあさんは、

「じえつとこーすたーはこわいし、こどもがのつたらおもしろがるとおもうけれども、めがかたつむりのころうらのようになるから、じえつとこーすたーよりたのしいのりものがあるぞ。」

と、とらのおやがいうとこどもは、ほっとしました。

そうして、おしゃべりをしているあいだに、ゆうえんちとれすとらにつきました。そして、くまのおねえさんたちと、とらのおやこがおりていきました。

つぎにやってきたのは、ねずみのきょうだいです。やってきたねずみは、3さいと5さいと8さいと12さいの4ひきです。ねずみは、きやんぷにいくところでした。

ねずみは、きしやにゆられながらおはなしをしているあいだにきやんぷじようにつきました。

さいごにのってきたのは、かんがるーのおやこでした。おかあさんかんがるーは、

「おんせんにいきたいです。」

と、いつて、きしやにのりました。

そして、おんせんにつきました。あやちゃんとかいくんもいつしよにおりることにしました。

かんがるーのおやこと、あやちゃんとかいくんは、いつしよにおんせんにはいつたりおいしいごちそうをたべたりしました。

そうしているうちに、あやちゃんとかいくんは、おうちにかえりたくなってきました。

そこで、かんがるーさんにきました。

そうしたら、かんがるーさんは、こういいました。「ねていれはどうにかなるよ。」

そこで、ふたりと、かんがるーのおやこは、ねました。

そしたらふたりがめをさますと、そこは、じぶんたちのおうちでした。

ふたりは、ゆめをみていたのです。

おわり

友だちになつて

越喜来小学校二年 畑野 寧音

大ふなどには、なつむし山という山に、こうえんと、おゆっこがあります。なつむし山のこうえんには、しかが森からやってきます。

ある日、しかがあそんでいると、くまがやってきました。しかはびっくりして森の中にかくれていました。それを見たくまは、しかににげられて、とってもかなしくなりました。くまは、いつも一人ぼっち。さみしくて友だちがほしかったのです。

そしてまたある日、しかが、木の花をとろうとした時、きゆうに足をすべらせてしまいました。すると、くまがすごいスピードでかけつけて、しかをたすけてくれました。

「ありがとう。」

しかが言いました。「こわいと思っていたけれど、ほんとうはとてもやさしくまさんなんだな。」と思い、しかはゆう気を出してはなしかけました。

「くまさん、ぼくとあそぼう。」

すると、くまは言いました。

「やった、キミははじめての友だちだ。」

「どうしてだい。」

「だって、みんなぼくのことをこわがって友だちになつてくれないんだ。」

くまはかなしそうに言いました。

「そうなんだ。」

しかもまたかなしそうに言いました。

しかとくまは、くまにどうしたら友だちができるか、かんがえました。

「そうだ、かんばんを作ろう。」

そう言うと、しかはかんばんにこうかきました。『みなさんここにきたらお茶とクッキーをごちそうします。くまさんとあそびましょう。』しかし、みんなは、くまがだましていると思つてきてくれませんでした。

「これじゃだめみたい。」

そう言うと、しかとくまは、かんがえながら山をおり、下の方にあるグリーンパークにやってきました。する

と、一びきのひつじがいました。ひつじは、くまを見ておどろいて草むらにかくれようとしました。その時しかがあわてて言いました。

「ちよつとまつて。」

するとひつじはちよつとだけかおをあげました。

「なあに。しかさんにもげた方がいいよ。あぶないよ。」

「ぼくはだいじようぶ。くまさんは友だちがほしいだけなの。ほんとうはやさしいんだよ。」

ひつじはそれを聞いて、くまを見てみました。するとくまはともかなしそうなおをしていました。ひつじは、ゆっくり草むらから出てきて言いました。

「わたしも、ひっこししてきたから友だちがいないんだ。よかったら友だちになろう。」ひつじがそう言うとかくまはともよろこびました。そしてまた、ひつじは言いました。

「わたしにいいかんがあるよ。」

「なに？」

しかがたずねました。

「人にばければいいんだよ。」

「でも、どうすれば人にばけれるかな。」

こんどはくまがたずねました。

「かみの毛やふくを、ひつじの毛で作ったり、ひつじの毛をこまかくちぎってブレスレットにしたりするん

だよ。」

それを聞いて大いそぎでかみの毛を毛糸で作って、ふくを作ってペンキでくまのかおをぬりました。さあ、これでにんげんにばけたくまのできあがりです。

「よし、これでかんせいだ。それじゃあいってらっしゃい。」

「いってきます。」

くまはまず、でん車にのって、よしはまにやってきました。よしはまをあらこちらまわっていると、

「たすけて。」

という声がしました。くまは声のする方へ行ってみると、男の子が木からおりれなくなっていたのです。くまは、男の子をたすけてあげました。

「ありがとう。お兄さん。」

「どういたしまして。」

とおくの山がいつもよりずっときれいに見えました。すると、

「だれかとつて。」

という声がしました。

「どうしたんだい。」

くまがたずねました。

「風せんが木にひかかってとれないの。」
男の子が言うと、

「それならばくにまかせて。」

くまは木にのぼってひっかかった風せんをとりました。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

風が、いつもよりきもちよくかんじました。

よしはまのこまっっている人がいなくなったので、こんどはいかわにやってきました。すると、

「ううん、とれないな。」

という声がしました。

「どうしたんだい。」

「ボールが川の中に入ってとれないんだ。とってちょうだい。」

「まかせて。」

くまは今までおぼれたことがないので、はりきってへんじをすると、ボールをかるがるとってあげました。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

花の色が、いつもよりきれいに見えました。

くまがあちらこちら町をまわっていると、あつというまに昼ごはんの時間になっていました。くまは、おべんとうのはちみつをたべました。すると、
「だれかけてくれ。」

という声が聞こえました。

「どうしたんですか。」

「火がきえないんだ。」

「ぼくもてつだいます。」

くまとしょうぼうしさんが、水で火をけそうというしょうけんめいがんばっています。そうしているうちに、やつと火がきえました。しょうぼうしさんは言いました。

「ありがとうございます。これでもうあんしんです。」

「どういたしまして。」

かえりみち、なみいたかいがんのなみがかぜにゆらゆらゆれて、いつもよりきれいに見えました。

そのころ、なつむし山では、しかとひつじがこう茶をのんでいました。すると、小鳥がやってきました。

「今とってもやさしいにんげんがいるんだって。」

「そうなんだ。」

しかとひつじは、くまさん、うまくやつてるみたいだなと思い、目を合わせてこっそりわらいあいました。

小鳥は、なんでふたりともわらっているのだろうと、くびをかしげながらかえっていききました。

しばらくすると、くまがえがおで帰ってきました。

「おかえり。」

「ただいま。」

「おかえり、お友だちできた？」

「うん、できたよ、たくさんありがとうと言ってもらえたよ。」

「よかったね。」

「うん。」

やさしいところで人だすけをすると、たくさん友だちができることがわかった。くまは、今も人だすけをつづけています。

奨励賞

【小学生高学年部門】

木の気持ち

越喜来小学校四年 田端 里帆

私は、『大船渡』という海辺の町にある、『越喜来小学校』という小さな学校に通う四年生だ。

私が小学校に入学した年は、大船渡に住む人々にとって忘れられない年となっている。なぜなら、大きな地震が町をおそったからだ。いつもはきれいな大船渡の海は、津波というおそろしい物に姿を変えて、町を飲み込んだ。

私も長いことひなん生活を送った。公民館やおばさんの家、友だちの家にひなんさせてもらいながら、たくさんの人に支えてもらいながら、何とか生活することができた。

「これからどうなってしまうんだろう」と、不安な気持ちでいっぱいになっていたある日のこと、泥やこわれた家でごちゃごちゃとしている町の中を歩いていると、どこからか、「ワン」という犬のような鳴き声が聞こえてきた。

私は、声の聞こえた方へかけていくと、がれきの中から声がすることが分かった。

次の瞬間、私は近くで救助活動を行っていた『自衛隊』の人を呼んできて、がれきをすっかりきれいにどかしてもらった。

すると、思った通り、中から一匹の犬がでてきた。まん丸で茶色い目、きれいに生えそろった真っ黒な毛、クルンと丸まった小さなしっぽ、どこを見てもかわいいと思った。

私はその犬を『ショコラ』と名付け、引き取ることにした。

大きな地震から三年以上がたった。私は新しい家に住んでいて、ショコラと毎日楽しい日々をすごしていた。

ある日のこと、シヨコラと一緒にマラソンをしていた。シヨコラは私の先生、だって私よりもずっと速くかけていくのだから。

走りつかれたので、少し立ち止まって呼吸を整えていると、どこからか、

「ボソッ。ボソボソッ。」

という気味の悪い音が聞こえてきた。こわくなった私は、つかれているのも、苦しいのがまんして、家へと走った。シヨコラよりも速いスピードで。

夕食の時間にそのことをお父さんとお母さんに話した。

「それは、風で木の葉がこすれて鳴ったんじゃないの。」とお母さん。

「お母さんの言う通りだと思うなあ。」とお父さん。

どっちも、全く私の話に真剣に答えてくれない。私だって、木の葉がカサカサと鳴る音くらい分かるのに。

次の日も同じ時間に同じコースを走った。

やっぱり前の日と同じ場所であつかれてしまい、ひざに手を置いて呼吸を整えていた。

すると、また「ボソッ。ボソボソッ」という音が聞こえてきた。こわかった。けれども、初めてではなかったから、どこから音がしているかを聞こうというよ

ゆうもあった。

すると、とても不思議なことに気が付いた。どうやら、周りの木々が「ボソッ。ボソボソッ」と言っているようなのだ。

さらにおどろくことに、私が息を切らして「ハア、ハア。」と言うのに合わせて、「ボソッ。ボソボソッ」という音がするのだ。

「ハア、ハア。」

「ボソッ。ボソボソッ。」

「ハア、ハア。」

「ボソッ。ボソボソッ。」

「ハア、ハア。」

「ボソッ。ボソボソッ。」

「ハア、ハア。」

「ボソッ。ボソボソッ。」

私が息を切らすリズムに合わせて周りの木々が返事をしてくれているみたいでおもしろかった。

けれど、何回かくり返しているうちに、私が「ハア、ハア」と言わなくても、勝手に、

「ボソボ」

「ボソボ」

という音を出し始めた。音を出すだけでなく急に動き出して、木と木が集まり始めた。まるで、木と木が会

議を始めたみたいに。

木の会議を聞いているうちに、私も木としゃべれないかと思い始めた。木としゃべった人間なんて聞いたことがないし、それに私は英語だってしゃべれない。とても不安だったが、おそろおそろ話しかけてみた。

ふつうの日本語で、

「こんにちは。」

すると、さっきまで話していた木たちは、急に会議を止めた。辺りはしずかになった。

それから少し経った時、一本の木がそばに寄ってきて、

「おれたちを切りにきたのか。それなら、とっとと帰っておくれ。」

と私に話しかけてきた。ふつうの日本語で。

「そんなつもりはないわ。私が、この辺りを走っていると、ボソボソ音を出すでしょ。それが気になっていただけよ。」

すると、一番年をとっていて、古ぼけた木が私の横まで動いてきて、ドシッと止まった。

「実は、お前さんに話しかけていたんじゃない。ふつうの人間には、わしらの鳴らす音が聞こえないのじゃが、お前さんはわしらの音に気が付いてくれたからのお。」

という古ぼけた木の話を聞きながら、私はなんだかうれしい気持ちになった。

「わしは、もう十分長生きをした。このままでは、ますます古ぼけてたおれてしまうだけじゃ。だから、たおれる前に、何か人間のためになることはないかと考えておったのじゃ。」

古ぼけた木の話を聞いてから、もう三日がたった。いろいろと考えたけれど、全く良い案はうかばなかった。家に帰ってお父さんにそうだんしたけれど、やっぱり信じてはもらえなかった。

「おい、たばた。ぼけっとしているな。音楽の授業、始めるぞ。」

音楽の小松先生に注意されてドキッとした。小松先生は、とっても上手にピアノを演奏する。「わたしも、小松先生みたいにな、上手にピアノをひけるようになりたいな」と思い、今年からピアノ教室にも通い始めた。「ピアノかあ……。あつ。」

急にグッドアイデアがうかんできたので、自分でもおどろいた。

「そうか、ピアノにすればいいんだ！」

小松先生は、私の話を真剣に聞いてくれた。「木が

話しかけてきた」なんてじょうだんみたいな話を、最後まで一生けん命聞いてくれた。

そして、わたしは、どうやってピアノを作るかを小松先生に相談した。

すると、小松先生は知り合いのピアノ職人を紹介してくれた。やはり、その職人さんも「木が話しかけてきた」なんてじょうだんを信じてくれてピアノを作ってくれることになった。

そこからは、あつという間に作業が進んだ。

古ぼけた木を切りたおす作業は、とても大変だった。

十人もの大人が手伝ってくれたが、この人たちを呼んでくれたのも小松先生だった。

そして、その切った木を材料にしてピアノ職人がピアノを完成させた。その木のよさを伝えるためにピアノに色はぬられていなかった。古ぼけた木が生まれかわったようで、わたしは心がはずんだ。わたしは、ピアノを見てひきたくなった。それで、わたしはピアノの練習をいままで以上にがんばった。

それから、一ヶ月がすぎた。

わたしは、小松先生に協力してもらいピアノコンサートを開くことにした。会場はもちろん「ボソッ。ボソボソッ」という変な音が聞こえた所、古ぼけた木と

出会った場所。

お客さんは、大きな地震でひ害を受けたかせつ住宅に住んでいる人達。その人達をゆう気付けたくて、ひく曲は元氣の出る曲を選んだ。

コンサートには、たくさんの人が来てくれた。その数を見て、「こんな大ぜいの人の前でひけるのだろうか」と、不安に思っていた。

すると、そこにシヨコラがかけて来た。そのしゅん間、シヨコラをがれきの中から救い出したことを思い出した。その時のシヨコラの姿にゆう気付けられ、わたしはピアノの前にすわることが出来た。

けんばんに手を乗せて、感しよくをたしかめた。手ざわりが良く、まるでけんばんが一人でに動き出しそうなくらい軽かった。

指は、スラスラ動き、ひいていて気持ちが良かった。ひいていると古ぼけた木がわたしに「がんばれ」と応援してくれているような気がして、ますます聞いている人達を元氣付けなくなった。ちらりと、お客さんの方を見ると、みんな気持ち良さそうな顔をしていた。

コンサートから半年がたった。わたしは今もシヨコラとマラソンをしている。走っていると時々「ボソッ。ボソボソッ」という声がしてうれしくなる。

そうそう、ピアノを作る時にあまった材料でショコラの小屋を作った。ショコラは、毎日うれしそうにそこでねている。

震災が伝えたこと

大船渡北小学校六年 木下 愛友

東日本大震災から3年がたつ今、二〇一四年。これは、あの時3年生だった、ある女の子の話だ。

もえは、めんどくさがりやで、勉強が苦てな女の子。だから、友達もあまりいなくて、小学校生活があまり楽しくなかった。もえの友達は、ぬいぐるみのクマと、保育園からの仲よしのはなちゃんだ。はなちゃんは勉強もできて、運動もそここの、優等生だった。もえとは、好きなことや、物事の感じ方が似ていて、とても仲良しだった。

今日は、始業式。もえたちは、3年生になった。担任は新しく学校に来た、みずの先生だ。みずの先生が「よろしくお願いします。」
と言うと、

「よろしくお願いします。」
とみんなが返した。みずの先生は、笑顔で前列の子と

話をしていた。

「あの先生若くてかわいい。」

とか、

「やさしそう。みずの先生が良かった。」

という、2、4年生の声が聞こえてくる。でも、もえにとつてはそんなことはどうでもよくて、

（早く帰って遊びたい）

そんなことを思っていた。

3年生になって約5カ月。だんだん勉強の差がでて、いじ悪する子がでてきた。もえもいじ悪をされはじめた。

「バカ。」

「キモ。」

そんな言葉が、もえにふりかかる。それも先生のいない場所で・・・。

ある日、いじ悪されても、気にしないで生活していたもえにいらだたいたいじめっ子たちは、集中的にもえにいじ悪をした。外ぐつが捨ててあったり、「大キライ」という紙が、げた箱の中にたくさん入っていたりした。そして、だんだんもえも、悲しくなってきた。教室のすみっこで泣いていた。そこに、はなちゃんは来なかった。なぜなら、3年の夏休みに親の都合で転校していったしまった。

（もう一人。ひとりぼっちだ・・・。）

そう思うとすぐくつらい。その時、みずの先生が教室に入ってきた。

「もえさん。どうしたの？」

やさしく声をかけてくれた。先生のあたたかな笑顔を見ていたら、今までのことを、すべて話してしまった。

「そうなの・・・。」

「私はどうして勉強ができないんだろう・・・。大きい!! このクラスには、やっぱりいないのかも・・・。」

「もえさん。いらなくなんてないわ、もえさんはこのクラスに必要なかけがえのない人よ。」

「え？」

「だってもしもえさんがいなかったら、私とっても悲しいわ。それに、日直も係の仕事も、プールに入る時のペアも、もえさんがいなかったら、みんな一人よ。もえさんが一人ぼっちって思った時、どうだった？」

「悲しかった。」

「でしょ。それに、今みんないじめをしてるかもしれないけど、もえさんがいなくなったら、心のおくで、悲しむと思うわ。」

「うん・・・。」

もえはうれしかった。自分がいなくなったらみんなが悲しんでくれる。自分が必要とされている。そう思う

とすぐうれしかった。

もえは、勇気がわいてきて、勉強の努力をするようになった。100点もとれるようになって、いじめっ子たちにギャフンと言わせることもできた。ちはやちゃんという新しい友達もできて、毎日がすごく楽しかった。

私は、ひとりぼっちじゃないから。

（こんな毎日が、ずっと続けばいいなあ。）

でも・・・。

三月十一日。あんなおそろしい地震がおこるとも知らないもえは、ちはやちゃんといっしょに登校していた。でも、みずの先生がいなかった。副校長先生が、「みずの先生は、かぜでお休みです。」

とおっしゃった。軽いかぜなのだろうけど、私の大切な人だから、心配で心配でたまらなかった。

「みずの先生は、明日にはくるよ！先生強いからすぐ治るよ！」

ちはやちゃんが言った。

「そうだね！明日には来るよね！」

（みずの先生なら早く治して明日には来るよね！はやく会いたいなあ。）

でも・・・。

「ゴゴゴゴゴ。」

今まで一度も聞いたことがない音。

「何!!」

「キヤー!!」

みんながさわいでいる。私もすごくこわかった。かつてに体がゆれていて、すごく変なかんかくだった。

「みなさんつくえの下にもぐって下さい!!」

副校長先生がさけぶ。

（何がどうなってるの!!）

目をつぶると、泣き声やさわぎ声があちこちから聞こえてくる。私はゆれがおさまるのを今か今かと待っていた。

そして、とうとう大きなゆれがやんで、教室が静かになった。

「みなさんおちついて。ならんで校庭へ行ってください。すばやく移動してくださいね。」

副校長先生のしじにしたがい、校庭にいくと地面にひびが入っていた。しばらく進んでうしろをむくと、わたり廊下のあたりの窓ガラスがわれていた。私は、おちついて考えた。今おこっていたこと、それは地震だった。今までに体験したことのない大きな大きな地震だった。それに、町を見ると、黒いものが町をこわしていた。

（あれは何？津波？いつもの青くとうめいな波ではなく、なにかドロドロしたような大きな波だ）

もえは声もでなかった。目にはなみだがあふれていた。大好きな店、公園、たくさんの家があつというまにうばわれてゆく。

（ひどい・・・）

それしか言えなかった。言葉がうかばなかった。その後、お母さんがむかえにきて、家に帰った。でもねむれなかった。何回も何回も余震が来た。目をつぶると、町がのまれるこうけいが目にかぶ。すごくこわかった。お母さんに、「大丈夫、大丈夫・・・。」と言ってもらっていたら、いつのまにか朝になっていた。でも、気もちよいわけではなく、電気もつかず、テレビも見れなかった。小さいラジオをずっときいていた。お父さんといっしょに高台の公園に行き、街を見ると、街がなかった。こわれた家や車、木もなく、道路もわからなくなった。町は、まるでゴミの山みたいになっていた。

「津波ってこわいんだね。」

もえは、津波と地震のきようふを知った。

それから一カ月。登校日が来た。久しぶりの学校がすごく楽しみだった。

「おはよう。」

4年生の教室に入っていた。でも、おかしいことにみずの先生がいなかった。

「ちはやちゃん。みずの先生まだかな？」

ちはやちゃんは、無言のまま、下を向いた。話を聞いていた人たちも下を向いた。

「みずの先生、亡くなっちゃった・・・。」

（ん？今なんて言った？）

『亡くなった』確かにそう言った。

（みずの先生死んじゃったの・・・？）

涙があふれた。

「なんで、なんで!! どうしてみずの先生が死んじゃったの？」

もえは訳がわからなくなった。

あの時、みずの先生は具合が悪く家にいたそうだ。みずの先生の家は海から近かったため、津波がすぐに来たらしい。

（先生。先生・・・。）

おもいかえすたびにすごく悲しい。今までに経験したことのないこの気持ち。いままで、身近で『死』というものにふれる事がなかった。『人の死』というものを初めて経験した。

みずの先生のおそうしきの日。おそうしきには、親族の方々と、私たち元3年1組のせいとが出席した。お仏壇にかざられた、みずの先生の笑顔を見るたびに悲しくなる。

「天国で、ゆっくり休んで下さい。」

そう言ってもえは、一りんの菊の花をおいた。

かけがえのない、一つのとうとい命が、失われた。もえにとつて東日本大震災は、いろんな事をおしえてくれた。みずの先生やたくさんの人々の命をうばったあの津波は、とてもにくらしいけど、人の命のとうときと、いつ何がおこるか分らないから、いまあるすべての事を大切にしていかなければいけないと教えてくれた。

それから、もえは、みずの先生のように、やさしい教師をめざして、がんばっている。

「先生見ていてね。私きつと、みずの先生みたいなあたたかい笑顔の先生になるからね。」

奨励賞

【中学生部門】

本当に大事な物

越喜来中学校二年 大津 希梨

心の中で「先生」と呼んでみる。大木やその四方を

囲む森林のお陰で日光が遮断されて、こんな猛暑日だというのに、そこだけは地面が冷たく、ひんやりとしていた。

ここはかつて姉が気に入っていた場所だった。ここに居ると自分までもがこの森の一部になった気がするから不思議だと姉は語っていた。私も来てみて姉に共感した。まるで物語の中に出てくる景色のようだとさえ思った。

やっぱり姉妹なのだなと薄く笑った。性格も顔も似ていないと言われていたから、こんな小さな事でも同じ感情を持てたというのは私にとってはとても嬉しいことだった。

もっと早く姉の気持ちに気付いていれば今とは違う未来があったのかな、ともう何度目かも分からない後悔が頭の中をよぎった。

あの時のほんの一瞬、私は重大な間違いを起こした。私の犯した罪は何をしたって償うことが出来ない。それくらい重大な罪なのだ。姉のたった一つの命を私が殺したから。

姉は私と歳が一つだけ離れていた。勉強や運動が特別出来た理由では無かったが、友達が多くて、人目をひく彫の深い、モデルのような顔をしていた。

それに反して、私は目も一重で細長いし、鼻も低く、

顔の輪郭も丸い。ぱつとしない地味な顔立ちをしている。顔だけでなく、性格も姉と正反対だった。一人でいるのが好きな私と友達といるのが好きな姉。私には人を寄せつけない何かがあって、対象的に、姉は人を引き寄せる魅力があったのだろう。

幼い頃から、同じように時間を過ごして、同じ教育を受け、親から受ける愛情の量までも同じだったのに、どうしてこんなに違う人間が出来上がったしまったのだろう。物心付いた時からの疑問であった。

しだいに同じだったものが徐々に変化していき、姉がスポットライトの中心で、私はその裏方にいるように生活するようになった。

本当は分かっていた、その事に気付こうとしなかっただけなのかもしれない。私の事を一番理解してくれていたのは姉だったのに。

四年前の三月十一日、東日本大震災の日。姉と私は風邪をひいて学校を休んでいた。私の家は、海に近い所にあつたから、急いで逃げる必要があつた。二人とも風邪をひいて熱があつたから、足元が覚束無くて、高い場所へ避難するのにずいぶん長い時間がかかってしまった。波が足元まで来て、本当に危ない状況だった。私の方が前に出ていて、姉が後ろについて来ていた。私の方が逃げるのが早かったからだ。それでも距

離は十メートルくらいで、つかず離れずの感覚を保っていた。

「キヤー。」

と突如、悲鳴が聞こえた。後ろをふり返ると姉の首元くらいまで波が来ていた。

「助けて、里沙。」

と姉が私の事を呼ぶ。母と父は仕事に行っていたから二人きりだった。近くにいたのが、私だけだったから、私の名前を呼んだのだ。

私もすぐに助けようと思った。走っていけば、数秒の距離。助けてあげられると思った。

でも、ふと頭の中に黒い考えが浮かんできた。姉さえいなければ私は受験の事で恥をかかなくて済む。姉さえいなければ、周りの人が私を見てくれるんじゃないかと。

「キヤー。」

と二度目の悲鳴が聞こえた。ハツとして後ろを向いて駆け出した。でも、姉は黒い波にのまれて消えた。最後に見たのは姉の白くて細い腕だった。最後まで私が助けてくれると信じて疑わない姉の腕。私はその光景を目にして、急いで前を向いて、駆け出した。高い所を探して、神社を見つけてふらつく足元で、必死に逃げた。なんとか逃げ切って、呼吸を整えた。同時に涙

があふれ出て止まらなかった。私が殺してしまったのだと自分を責めた。誰よりも自分のことが嫌いになった瞬間だった。

それから、体重が一気に減少した。心配した母が姉の亡くなった場所から離れた方が良いんじゃないかと提案し、越喜来に引っ越して来た。父や母も姉が亡くなって、かなりショックを受けていたが、私の事を想ってくれて、あまり姉の話はしなくなった。姉のいない生活は、私には耐えがたいもので、あんなに憎んでいたのに、本当は好きだったのだと、亡くなって初めて気付いた。こんな嫌われものの私に優しく接してくれるのは姉だけだった。どんなに憎まれ口叩いても、言い争いをするでもずっと心のどこかで尊敬していた。

前に姉の友達の人に言われた事がある。姉は私の事を誉めていたそう。いつも勉強を頑張っていてすごいとか足も速くて自分の妹とは信じられないなどと言っていたらしい。私はその時は、否定していたが、その言葉がとても嬉しく何より姉が私の事をそんな風に想っていてくれたことが嬉しかった。

越喜来の町はとても良い所だった。みんな優しくて良い人だし、前に住んでいた所よりも静かで、海産物が美味しい。この町は、姉が友達と前に来ていた。三鉄に乗って、一度だけ。それでも姉はすごくよい所だ

ったからまた行きたいと何度も言っていたし、その時のことを何度私に話して来た。だから、私はこの越喜来という町に心密かに魅力を感じていた。

この町のおかげもあって、少しずつ私はもとの生活に戻ることが出来た。両親だって、私が勝手に思い込んでいただけて姉と同様に愛してくれていたんだと最近になって分かった。それでも、私は、姉の事をずっと考えていて想っていた。一人、静かな心安らぐ場所

で。
ある時、フリーマーケットに母と二人で買い物に行った。

そして、どうみても怪しいものをおじいさんから買った。「死者との交換日記」というものだ。絶対にありえないと思いつつも、買ってしまった。母にみられないように隠して家に持って帰った。交換日記は三日間しか出来ないとされた。あの世につながるにはそれなりの手続きやら面倒な事があるらしい。そしてもう一つの条件は、姉の生前の好きだった場所で書くことだという。日記を書いて次の日に来ると返事が書いてあるというものらしい。姉の好きな場所というので覚えているのは、大王杉という場所だ。姉は私と同様に静かで木かげになっているような場所が好きだった。堂々と立っている木がこの町の歴史を長い間見て来た

のだと思うと感動すると言っていた。最初は、何の事だかさっぱり分からなかったが、目の前にしてみると、姉と同じ様な事を思った。

私は大王杉の近くの神社のところで座ってあふれんばかりの思いをつづった。今までの後悔、懺悔、感謝、嬉しかった事、尊敬していた事、誰よりも好きだったということ。姉に届くように願いながら書いた。

次の日、日記をみに来ると、何も書かさっていなかった。まあ、当たり前だよなと苦笑いしながら、でも心のどこかで明日は日記に何か記入してあるんじゃないかと淡い期待を抱いていた。

でも次の日、来てもやっぱり日記に返事はなかった。そして、三日目。今日記入して無かったら諦めようと思っていた。日記を開いてみて驚いた。びっしりと細かい文字で白紙の部分がうめつくされていた。その内容は、私に対する想いでいっぱいだった。心配しているということ、いつまでも自慢の妹だということ。そして最後に「ありがとう」と書いてあった。

涙が自然に零（こぼ）れた。姉は私には持っていないものを持っていた。「優しさ」、「人を思いやる気持ち」、「許す気持ち」。私があんなひどいことをしたのに姉は私を憎んでもいなかった。それどころか、私のこれからの事を心配してくれた。姉が人から好かれる

奨励賞

【高校生部門】

三月十一日への想い

高田高校一年 熊谷 俊亮

理由がよく分かった。私は姉には到底敵わない。勉強よりも運動よりも大切なものが何か知っていたのだ。姉のような優しい人間になりたい。姉のような心の広い人間に。私はもつと変わりたい。勉強も運動ももつと頑張つて、何より人として成長したい。私はこれからも努力していく。姉と共に。

一人でガッツポーズをとつて赤く目をはらして姉の好きだった大王杉が私に笑いかけてる気がした。

今までの自分に「サヨナラ」と告げて、大王杉から私は去った。

大王杉は持っているのだ。私に足りない何もかもを。杉がそんな感情持っているはずが無いと思つて笑えるかもしれないが私にはそんな気がしてならない。私には「先生」のような感じがする。そういえば、姉も同じ事、言つてたような気がする。おもわず笑顔がこぼれる。

俺は、三月十一日、東日本大震災を忘れることができない。いや、忘れたくない。

俺は津波を甘く考えていた。小さい頃にも何度も津波を見てきた。それはとても規模が小さいものだった。

平成二十三年、三月十一日、当時俺は小学生だった。もう少しで卒業式だった。その日も、「もう少しで、卒業」と嬉しくも寂しい気持ちで、卒業式の練習をしていた。

式の練習が終わり、教室に戻ると、先生が寂しそうな顔で、「もう、お前達ともお別れだな」と言つた。

皆は「先生らしくない」と笑っていた。その直後、教室が、大きく、揺れた……

——目が覚めた。

「朝か……」

嫌な夢を見た。あのまま夢の中にいれば津波で家や工

場が流されるところまで見ていたかもしれない。そう考えるとゾツとした。

「大丈夫？」

妹が声をかけてきた。こいつは当時小学三年生だった。すぐパニックになり、泣きそうだったのを覚えてる。

「大丈夫だ、問題ない。」

キリッとした顔で言ってやった。

「全然かっこよくないから。」

「すんません。」

「分かればよし。」

なんて、冷たい妹だ。小学校のときは、とても可愛らしかったのに。

「また、震災の夢、見たんでしょ？」

妹が話しかけてきた。

妹は、震災がトラウマなのだ。俺が中学三年の時、余震があり、津波のサイレンが鳴り響いた。妹は涙を流して恐がっていた。今では海に近づこうともしない。「いいかげん忘れれば。震災のこと、まだ引きずってるの？」

忘れられるはずがない。それは妹も同じなのだろう。トラウマになるほどだ。俺より妹の方が、引きずっているのだろう。

妹は、小学三年の時、津波を見て、泣きそうになっていた。サイレンと、波の音、そして、壊れていく町。まわりの大人達でも泣いている人がいた。だが、妹は、涙を流していなかった。

その夜、電気が使えなくなり、月と星は雲に隠され、まさに「闇」だった。父さん、母さんの安否も分からなかった。家にいるのは俺と妹の二人だけだった。そして、

「知り合いのAさんが亡くなった。」

という知らせが入った。Aさんは、父さんと二人でよくビールを飲んでいた。俺や妹にもとても優しくしてくれた。親に秘密でおこづかいをくれたこともあった。

身近な人が亡くなった。信じることができなかった。そして、そのショックは、当時小学生だった俺と妹を不安にさせた。

父さんと母さんは大丈夫だろうか。まさか逃げ遅れたのではないか。そんな考えが頭をよぎった。

駄目だ、そんなことを考えては駄目だ。分かっている。分かっているのだ。だが、ネガティブなことしか考えることができなかった。

その時だった。妹が泣きだした。

「お父さんとお母さん、帰ってくるよね。明日になれ

ば帰ってくるよね？」

「大丈夫、帰ってくるよ。」

妹に俺はそう言った。妹を安心させるために、自身にそう言い聞かせるために。

次の日の朝、嫌な夢を見たと思い、学校に行こうとした。夢だったらどんなによかったか。自分でも分かっていた。でも、認めたくなかった。夢だと思っていたかった。

「お兄ちゃん。」

妹に呼び止められた。その涙で腫れた目を見て、俺は泣きそうになった。

妹は、この地獄のような現実を受け入れていた。俺は自分の弱さに泣きそうになった。

父さんと母さんが帰ってこない今、妹を守れるのは、俺しかいないのに、逃げ出そうとした自分の弱さに泣き出しそうになりながら妹に言った。

「ごめん。」

次に言われた言葉は、妹の口ぐせだった。

「分かればよし、きつと大丈夫。」

今の状況など、妹も分らないくせに、「大丈夫」と言った。妹は俺を励ましてくれた。

その日から、俺と妹は、不安になったら、「きつと大丈夫」と言って励ましあった。

震災から三週間後、母さんが帰ってきた。その顔は涙でぐしょぐしょになっていた。

その後、父が五日遅れで帰ってきた。陸前高田にいる、じいちゃん、ばあちゃんの方へ行っていたそうだ。

家族が帰ってきた。いつも通りとはいかないが明るい生活が戻ってきた。

時は経つ。今はもう海を怖がる必要もない。だが、忘れかけた時に震災の夢を見る。まったく同じ夢を……

「早く朝ご飯食べよ。お兄ちゃん、スクールバスに遅れるよ。部活に行かないの？」

「大丈夫、今日は部活休みだから、そのかわりに、高田のおばあちゃんのところに行くけどな。」

「いつ？」

「朝メシ食ったら。」

「私も行くの？」

「うん。」

「何で？」

「父さんに頼まれたから。」

「私、聞いてないけど。」

「お前が風呂に入っているときに言われたからな。」
妹は、露骨に嫌な顔をした。

「行けばいいんでしょ。」

「分かればよし。」

「真似しないでよ。」

「ゴメンゴメン。」

「分かればよし。」

二人で笑いあった。

BRTに乗って、陸前高田市気仙町まで行き、ばあちゃんの仕事場に向かった。

仕事場に近づくと、海が見えてきた。

そう、仕事場は、海の近くにあるのだ。妹が大嫌いな海の近くに。

「私、ばあちゃんの家で待ってるよ。」

「駄目だ。」

「いいじゃん別に、お兄ちゃんだけで。」

「行きたくないんだろ。」

「そんなワケじゃないけど・・・。」

「なら行くぞ。」

妹が海を怖がるのは、誰よりも分かっている。でも、それでは駄目なのだ。いつまでもあの「三月十一日」に苦しめられていては。

妹も、少し遅れ気味で俺の後をついてきている。

仕事場のドアを開けると、水の音と、ばあちゃんの声が聞こえてきた。

「あらあら、よく来たねえ。」

「ばあちゃん、久しぶり。」

妹が笑顔を見せた。

「ばあちゃん、久しぶり。」

「ありがとねえ。今日は人が少なくて大変だったんだよ。」

妹は明るく振舞っていた。ばあちゃんに余計な心配をかけたくないのだろう。

「じゃあ、早速手伝って頂戴な。」

手伝ったことは、ワカメを大きな水槽からカゴに移す作業だ。「ワカメなんて軽いから楽勝だろ」と思っていたが、けっこう重く、量が多かったので驚いた。

「じゃあ、そろそろ休もうかね。」

ばあちゃんが、休憩の合図を出すと、仕事をしていたおばさんが、どら焼きをくれた。

「あつどうも、ありがとうございます。」

働いた後の甘いものは、とても美味しかった。

休憩が終わり、また仕事が始まった。作業にも慣れてきたので、前半より仕事のペースが早くなってきた。前半よりも量が多かったが、すぐに終わってしまった。

「若い人がいると、仕事が早く終わるねえ。」

ばあちゃんは感心している様子だった。

仕事が始めに終わったので、座っていると妹がばあちゃんに質問した。

「ねえ、ばあちゃん、ばあちゃんは海が怖くないの？」

俺は驚いた。「海」への恐怖を拭いさろうとしているのだろうか。

「ああ、怖いよ。」

ばあちゃんは答えた。そして、続けてこう言った。

「だけど、好きなのさ。」

「どういう意味？」

妹は、表情を変えていた。

明るく振舞っていた時の顔ではなく、不安と疑問が交じりあっている。そんな顔をしている。

「海はね、いつも私達に寄り添ってくれるんだ。海があるからおいしい魚や貝が食べられる。海があるからワカメが獲れて、あんたがワカメ仕事を手伝ってくれたんじゃないか。」

ばあちゃんは、しわの多い手で、妹の手を握りしめた。

「海は確かに人に牙を向けることがある。でもね、それと同じくらい、いやそれ以上に笑顔をくれるんだよ。」

ばあちゃんは笑った。その笑顔は、とても温かく、美しかった。

その後から、あの「三月十一日」の夢は見なくなつた。だからこそ忘れてはいけない、そう思った。ただの「恐怖」の記録ではなく「未来への教訓」として語りつぐ記録として残さなくてはならないと。

妹は、手伝いから帰った後、パソコンや本で、大船渡を、もっと知るために。

妹は、「大船渡は、震災前よりも良い町になつていくような気がする」と言っていた。確かに皆が互いに手をとりあい、復興を目指しているこの町は、いままでもよりも、輝いていると思う。

奨励賞

【一般部門】

ドンドコドの星の海

ほし うみ

中村 祥子

さちこ

1

なが
長い雨がようやくあがつて、夏なつの夜空よぞらにたくさんの星ほしがかがやいています。

ママが、いいことをおもいつきました。

「レミちゃん、こんやは絵本えほんじゃなくて、お星ほしさまを見ようか。」

やったあー。レミはモモをだいて、いそいでベッドにもぐりこみます。

モモは、ウサギの大きなぬいぐるみです。レミが三さいになった日に、大船渡のおばあちゃんがつれてきてくれたのです。六さいのレミはぐんぐん大きくなったのに、モモはいつのまにかよごれて小さくなりました。

でも、モモはいちばんのおともだちです。レミもモモも絵本は大好きですが、星を見ながらママのお話をきくのはもっとたのしい。

ママはまどをあけて、へやのあかりをけしました。

「あ、お星さま、みいつけた。」

「ほんと。きれいな星空ねえ。」

むしあついへやに、夜のすずしいかぜがながれてきます。

そのときです。

ルルル…とでんわがなって、パパがあわててママをよびました。

「はい、そうですが…ええっ?。」

ママの手がふるえています。レミはモモをぎゅっとだきしめました。

「おばあちゃんがたおれて、にゅういんしたんだって。パパ、どうしよう。」

「たいへんだ! すぐびよういんへいこう。」
それからいそいできがえて、みんなでパパの車にのりました。おばあちゃんがすんでいる大船渡は、山のむこうのみなと町です。

いつもはたのしいドライブですが、パパもママもだまっています。星もなきたいのをがまんしているようです。やっとかおをだした月も、しんぱいそうに車についてきます。

「なんだろう、山のむこうが光^{ひか}っているぞ。」

パパのおどろくこえをきいたような気もしましたが、レミはモモをだいたまま、いつのまにかねむってしまいました。

そうして、ふしぎなゆめを見たのです。

おばあちゃんといっしょに、夜の浜^{はま}辺にあるいていきます。いいえ、手をつないでいるのはモモです。レミは赤ちゃんになって、おばあちゃんにおんぶしていました。

おばあちゃんは、夜空を見あげます。

「ああ、今夜は、いい星空だねえ。」

「あ、たいへんだ。おばあちゃん、お星さまがいっぱい海におちてる！」

モモが海をゆびさすと、おばあちゃんがわらってこたえました。

「アハハ。あれは星じゃなくて、漁火だよ。」

「いさりび？」

「船が、あかりをいっばいつけているの。暗い海をあ

かるくてらせば、魚たちがいっばいあつまってくる

からねえ。」

「どうしてあつまってくるの？」

「きらきらしてきれいだからね。きっと魚たちもよろこんで、おどっているんだよ。」

「おまつりなの？」

「そうだねえ。魚のおまつりだねえ。」

「ふああ……。モモは、大きなあくびをしています。」「さあ、おねむのじかんだ。かえろうか。」

レミは、おばあちゃんのかたから、とおい海ををたしている光のれつを見ました。

ドドンコド、ドドンコド、ドドンコド……

海をわたって、たいこぼやしがきこえてきます。光のれつは、くるくるとおどりながら空へのぼって、やがて小さな星になりました。

2

レミが目を見ましたときには、もう大船渡のびょういんについていました。

おばあちゃんは、ひろいへやにひとりでねむっています。

「手をにぎってあげて。」

かんごしさんが、レミにやさしくいきました。けれども、レミはこわくてさわれません。

石のようにうごかないかおは、まるで知らないおばあさんみたいです。

おばあちゃんが目をさますまで、ママは大船渡のびょういんとまることになりました。でも、レミはパパとうちにかえらなくてはなりません。

つぎの日から、レミはパパとほいくえんにいきました。かえりもパパがむかえにきました。ごはんも、パパとふたりきり。

おふろもパパと。ねるのもパパと。

レミはさびしくて、なにをしてもたのしくありません。あそんでもらえないモモだって、ベッドのよこにしょんぼりとすわったままです。

ママのかわりに、絵本をよんでくれるといったパパ。でも、ちっともすすまないうちに、お話はとまってしまいました。

「パパ？」

グー、グー、グー、：

かいじゅうみたいな大きないきです。

あんまりうるさいので、レミはおきだして、そうつとまどをあけました。

そとはまっくらで、星も見えません。

レミは、まるでママがびよう気になって、にゆういんしているような気がしてきます。

もしも、このままママがかえってこなかったらどうしよう。いまにも雨がふりだしそうな空に、レミの目からなみだがぼろんとこぼれました。

でも、長い夜があげると、ちゃんとママからでんわがきました。

「おばあちゃんはまだ具合がわるいの。もうちよつと、パパとがんばってね。」

「うん、レミはだいじょうぶだよ。」

レミだって、大すきなおばあちゃんのためだから、がんばっていたのです。

3

ところが、四日目のゆうがたのことです。

レミは、とうとうなきだしてしまいました。あさからまっているのに、ママからのでんわがまだこないのです。パパがこまったかおをするから、レミはますますなきたくなります。

「パパも、レミがきらいなんだ。」

ああああーん！

「みんな、レミが大すきだよ。」

パパは、おろおろしていいました。

「おばあちゃんが元気になるまで、もうすこしのがまんさ。だから。」

「もういやだよう。おばあちゃんなんか、いなきやよかったのに。」

「レミ！　なんてことをいうんだ。」

パパが、こわいかおでおこっています。

ふえええん！

うわあああん！

レミは、ベッドにもぐりこんでなきました。

ベッドのよこでは、モモがじっとレミを見えています。

「モモったら、パパのみかたなの。」

モモは、なにもこたえてはくれません。

「モモなんて、大きらい。」

レミは、ほんとうにひとりぼっちだとおもいました。
かなしくて、さびしくて、ふとんをかぶつてもっと大きなこえでなきました。

ふえええん！

うわあああん！

「うるさい！」

耳のそばで、だれかがさけびました。

レミは、びっくり。ふとんからおをだしたら、へやがまっくらなのです。

モモも見えません。

「モモ？…パパ？」

すると、くらやみのおくから、ひそひそと話^{はな}すこえがきこえてきます。

「いったい、どこの子かしら。」

「わがままなチビだな。」

「なきむしなんかおいて、早くいこうぜ。」

「そうだよ、もうおまつりがくるよ。」

「でもかわいそう。きつとまいごなのよ。」

レミは、おもわずさけんでしまいました。

「レミは、チビでもまいごでもないもん！」

「しいーっ。」

4

くらやみの中に、小さなあかりがふたつ、ぽぽっと光りました。

「あ、ホタルだ。」

「ほら、見つかっちゃった。」

「にげろ。」

ホタルたちは、すべるようにへやのそとへでていきます。

そとは、じつとりとあたたかく、ふかいきりにつつまれていました。

ドドンコド、ドドンコド、ドンコ……

とおくからたいこの音がちかづいてきます。きつとあれがおまつりです。なかまにおくれた小さな光が、ぼんやりときりにかすんでいきました。

レミは、あわてておいかけます。

川ぞいの小みちをぬけると、海のかおりがしてきました。

みなとです。大きなかり火がパチパチともえてい

ます。足もとには、小さなとうろうがならんで、いろんな夜店よみせがでています。

ドドンコド、ドドンコド、ドドンコド……

ここちよいたいこをひびかせながら、きりの中から

大きな船ふねがあらわれました。

ピーオピー、ピーオピー、

カカンカ、カンカン

ふしぎな笛ふえと、かねの音もきこえてきます。まるで、

波と風なみ かぜがくるくるとおどっているようです。

船は、たくさんの光であかるくてらされ、いろいろ

どりの大漁旗たいりょうきでかざられています。大きなぼんぼりや、

ふきながしの七夕たなばたかざりもうつくしくゆれています。

大きな船のまわりには、小さい船がずらりとならんで、みなとからゆつくりとはなれていきます。

ドドンコド、ドドンコド……

やがて、さいごの船がとおりすぎると、海からたくさんの星が生まれて、空へのぼっていききました。

「うわーきれい。」

レミは、むちゅうで手をのばします。

「レミちゃん！」

よばれてふりむくと、モモでした。

「あぶないから、うごかないで。」

はつとして下を見ると、もうすこしで岸壁がんべきからおちるところです。レミは、いそいでモモにつかまりました。

「よかったア、レミちゃんが見つかった。」

モモがないています。

「ずっとさがしていたんだよ……。」

レミは、モモのあたたかうでの中で、おばあちゃんのことをおもいだしました。

あいにくと、いつも「また大きくなったねえ」って、だっこしてくれたおばあちゃん。

ホタテやおさかなで、たくさんのごちそうをつくってくれたおばあちゃん。

海にいつておよいだり、いっぱいあそんでくれたおばあちゃん。

たのしいことが大すきで、いつもわらっていたおばあちゃん。

「おばあちゃん……ごめんね。」

レミがささやくと、まっ白なきりがこくなって、もうなにも見えなくなりました。

5

いいえ、きりではありません。白とおもったのは

へやの天井てんじょうでした。

ゆめを見ているのでしょうか。でも、パパがしんぱいそうなかおで、レミを見つめています。

「パパだよ。レミ、わかるかい？」

それに、ママのやさしいこえまできこえてくるのです。

「レミちゃん、ママよ。ここにいるよ。」

くすりのにおいがします。

そこは、びょういんの中でした。

パパは、なきつかれてねむっていたレミを、大船渡までつれてきてくれたのです。

「ママにあえば、またいつものように元気なレミになるとおもったんだ。」

でも、びょういんについたときには、レミはとてもたかいねつを出していました。

「ごめんな、レミ。ねつがあつたのに、ちつとも気が

つかなくて。」

パパが、しょんぼりしています。

パパのせいではありません。レミはあわてて、ちがうよ、と手をふりました。

「そうよね、パパじゃなくて、ママがわるかったの。さびしかったでしょう、ごめんね。」

レミはあわてて、ちがうよ、とまたくびをふりました。ママのせいでもありません。

「おばあちゃんは？」

レミは、おばあちゃんのことがしんぱいでした。

いなければよかったなんて、ひどいことをいつてしまったのです。ママがきいたら、レミをきらいになつてしまうかもしれません。

でも、ママは、レミをぎゅっとだきしめました。

「レミ、ありがとうね。レミががんばってくれたから、おばあちゃんはどうだいじょうぶよ。」

「ほんと？」

「ええ。レミのことをしんぱいしてね、すぐにかえりなさいって、ママにいったの。」

なつかしいママのにおいです。

ドドンコド、ドドンコド、ドドンコド…。

たいこの音は、まだレミの耳のおくでひびいています。くもはながれて、星がまたたきはじめました。

作品集

《小学生低学年部門》

ふしぎ

末崎小学校二年 大和田 ひなの

小さな星が、びようしつのまどべでうれしそうに光って、なかまのところへとんでいきました。

* * *

「レミちゃん、よくきたね。」

きょうは、おばあちゃんがびよういんをたいいんする日です。レミは、パパとママと、もちろんモモもいっしょに、おばあちゃんのおむかえにきたのです。

ドン、ドドン！

はれた空に、花火の音^{はなび おと}がとどろきます。おばあちゃん

が、にこにこしていました。

「きょうは、夏まつりなんだよ。夜には、海からたくさん

の花火があがって、そりゃあきれいだから。」

「わあ、花火大会なんて、ひさしぶりね！」
ママがともうれしそうなので、レミとパパまでわくわくしてきます。

ほら、海をわたって、まつりばやし^{はな}がきこえてきましたよ。

(おしまい)

今、二〇五〇年十月。あの大きなしんさいから40年

もたっています。まちもきれいになりました。わたしは、44さいです。もう、けっこんして、お家もたっています。そのお家は、夜になると、

「ひなのちゃん、いっしょにあそぶ。」

という声が聞こえてきます。わたしは、こわいのでふとんの中にもぐりこみます。すると、その声の人がうたをうたいながら目の前に立っていました。

「ひなのちゃん、いっしょにあそぶ。早く。早く。」

「キヤー。」

とわたしはさけびました。おっとのマークが、

「What's wrong?」(どうしたの?)

と聞いてきました。なのでわたしは、

「ただのゆめ、ゆめ。」

とうそをつきました。そしたら、マークが

「Oh・・・I see.」（ああ、そうか。）

といいました。また、うたが聞こえてくるので、わたしは、その声の方へ歩いていくと、声はきえてしまいました。

つぎの日の朝、朝ごはんができたので、マークに

「ごはんだよー。」

と大きな声で二かいにむかってさけびました。今日の朝ごはんは、ごはん、まっさきわかめ入りのみそする、やきざかなはさけ。そしておいしいヨーグルトです。ごはんをたべてからマークは、しごとに出かけました。

そして、よるになるとまた、あの声が聞こえてきました。

「ひなのちゃん、いつもありがとう。気をつけて気をつけて。」

わたしは、何を気をつけるのかなあとおもいました。

その時、ピンポンと、だれかが家にきました。ドアをあけてみると、たくはいびんでした。たくはいびんの人が、

「あのう、だれがおくったかわかりませんが、このお家のじゅうしよが書いてあるので、よろしくおねがいします。」

といっぺにもつをおいていきました。

「ところで、だれがわたしに……。まっ、いいか。」

とおもつてにもつのはこをあけてみました。すると、その中には、たくさんのバラの花とお手紙が入っていました。お手紙にはこう書いてありました。

『ひなのちゃん、お家には水がありますか。かいちゅうでんとうやでんちはありますか。ラジオのじゅんびもしておきましょう。みんなわすれていますよ。』

そういえばちよつとゆだんしていたかな。でもだれの手紙だったのかな……。

いじわるくんとおこるちゃん

吉浜小学校 二年 岡崎 憂姫

よしはまだい三小学校に、いじわるくんとおこるちゃんという、けんかばかりしている二人の子どもと、ゆうきちゃんというやさしい女の子がいました。

ある日、いじわるくんは、おこるちゃんのおもちやをわざとこわして、おこるちゃんにいじわるをしました。いじわるくんはおこるちゃんに言いました。

「へんなおもちゃ。」

おこるちゃんは、かんかんにおこつて、けんかになりました。

けんかをとめるのは、いつもゆうきちゃんでした。でも、今日はぜんぜんけんかはとまりません。ゆうき

ちゃんは、こまってしまいました。ゆうきちゃんはか
んがえました。

「いじわるくんは、しんせつくんになればいいんだよ。」

「おこるちゃんは、にこにこちゃんになればいいんだ
よ。」

ゆうきちゃんは言いました。やつのことで、けんか
はとまりました。ゆうきちゃんは、ほっとして、目を
とじました。

ゆうきちゃんが目をあけると、いじわるくんとおこ
るちゃんは、なかよくあそんでいました。ゆうきちゃ
んは、びつくりしました。だって、あんなにけんかば
かりしていたいじわるくんとおこるちゃんがなかよく
していたからです。ゆうきちゃんは、明日はどうなる
かなと思いました。

つぎの日、ゆうきちゃんが行ってみると、いじわる
くんとおこるちゃんは、こうえんでなかよくあそんで
いました。ゆうきちゃんは、もうけんかをとめなくて
いいなと思いました。

それから、いじわるくんは、いじわるをしなくなり
ました。おこるちゃんは、やさしくなりました。三人
は、いつもなかよくあそびました。

べんきょうがきらいなみおちゃん

吉浜小学校 二年 庄司 美櫻

みおちゃんという女の子がいました。

夏休みになりました。みおちゃんは、なかよしのゆ
うきちゃんと、毎日あそんでいました。

ある日、ゆうきちゃんが

「ねえ、今日はべんきょうしよう。」

と言いました。みおちゃんは、べんきょうがにがてで
す。みおちゃんは、

「みおは、べんきょうがきらいなんかもん。」

と言って、ソファーにすわってしまいました。すると、
ゆうきちゃんが、

「がんばってべんきょうしよう。」

と言いました。みおちゃんは、ゆうきちゃんといっし
よにべんきょうをがんばってみることにしました。み
おちゃんは言いました。

「うん、分かったよ。」

つぎの日、二人は、いっぱいべんきょうをしました。
けれども、夏休みのしゅくだいは、おわりませんでした。
でも、みおちゃんは、がんばりました。ゆうきち
ゃんといっしょにべんきょうしていると、だんだんべ
んきょうのしかたが分かってきました。

何日かすると、しゅくだいがにがてだったみおちゃんは、べんきょうのしかたがじょうずになっていました。

そして、とうとう、夏休みのしゅくだいを終わらせることができました。うれしくなった二人は、大すきなウニをおばあちゃんにとってもらって、いっぱい食べました。おばあちゃんも、いっぱい、いっぱいほめてくれました。

「やったね。」

それからみおちゃんは、べんきょうがたのしくなりました。みおちゃんは、べんきょうがよくできるようになり、学校でも、たくさん手をあげてはっぴょうできるようになりました。

およげないたくくん

吉浜小学校 二年 白木澤 龍真

よしはまに、たくくんという男の子がすんでいました。たくくんの家は、山の中になりました。家のちかくには、大きないけがありました。

あつい夏の日でした。たくくんは、海へあそびに行きました。たくくんは、足はとてもはやいのにおよ

ぐのはにがてでした。海へ行っても、すなはまでばかりあそんでいました。たくくんは、家にかえると、ごはんをたべてねてしまいました。目がさめると、つぎの日の十時になっていました。

よしはまには、むかしから大きないけがありました。たくくんの家のそばのいけです。いけのふかさは、百メートル。はばは、百二十メートルもありました。そのいけには、一ぴきの金色のコイがすんでいました。たくくんは、目がさめると、外へ行きました。金色のコイを見ていたたくくんは、足をすべらせて、いけにおちてしまいました。金色のコイが、たくくんをたすけてくれました。そして、金色のコイは、たくくんにおよぎかたを教えてくださいました。でも、たくくんは、「明日からはれんしゅうしない。」

と言って、ねてしまいました。

次の日、いけに行ってみると、金色のコイは、金色のビートばんをたくくんにくれました。

たくくんは、家にかえりました。そして、

「明日は学校だ。イエーイ。」

と言って、わくわくしながらねました。

プールの時間、金色のビートばんをつかっておよいでみると、百メートルもおよぐことができました。すると先生が、

「すごいぞ、たく。」

と、大きな声でほめてくれました。たくくんは、うれしくなりました。

およぎがとくいになったたくくんは、水えい大会で一いになって、金メダルをもらいました。家にかえってお母さんに見せました。お母さんは、

「あら、すごいじゃない。」
と、ほめてくれました。

カニがいつぱい

吉浜小学校 二年 浅沼 俊哉

むかしむかし、よしはまの海のちかくに、しゅんやという、めんどくさがりやだけれどかしこい男の子がすんでいました。

ある日、しゅんやはカニをさがしに海に行きました。

「かほうはねてまで」と言うことわざがあるので、しゅんやは、ことわざどおり大きな岩のかげにわなをしかけて、岩の上でねてまつことにしました。

三十分ぐらいねていました。岩のかけから
「ごそっ。」

という音がしました。しゅんやは、目をさました。

あわててわなをあけて見ると、手のひらぐらいの大きなカニがかかっていた。

うれしくなったしゅんやは、友だちの春ゆきに見せることにしました。

「どうだい、このカニ。大きいだろう。」

と、しゅんやが言いました。

「そんなくらのカニ、たいしたことないや。」

春ゆきが言いました。しゅんやは、

「これだけあれば、大きいんじゃないか。」

と言いました。それから二人は、

「大きい。」

「小さい。」

「大きいっ。」

「小さいっ。」

と、言いあいになり、もめていました。すると、カニが、もめている二人のまん中であわをふいて、

「チュー。」

と言いました。

カニの大きさは、中くらいでした。

しゅんやと春ゆきは、カニと話ができたみたいです。

二人は、このカニと友だちになりました。

それからというもの、二人は、たくさんカニをとって、カニの友だちをふやしました。ですから、よしは

まの海には、今でも、たくさんのカニがいるのです。

あわびとおじいさん

吉浜小学校 二年 加藤 志

むかしむかし、よしはまのせんざいに、おじいさんのりょうしがすんでいました。

明日は、あわびの口があくことになりました。その年はじめてのあわびの口あけです。おじいさんは、よろこびました。そして、あわびをとるじゅんびをして、朝がくるのを待ちました。

四時三十分、あわびの口があきました。おじいさんは、きんじょのおじいさんをさそって、あわびの口あけに、はまにりました。

「わしは、何をすればいいんじや。」

きんじょのおじいさんが言いました。

「そうじやのう、おまえもあわびをいっしょにとろう。」
おじいさんは言いました。

その日、あわびは、ぜんぶで二十ことれました。おじいさんは、そのうちの五こをいっしょにあわびをとったおじいさんにわけてあげました。そして、その日の夜、二人はいっしょにあわびをたべました。今年の

あわびも、おいしくていいあわびでした。

それから、おじいさんは、きんじょのおじいさんと力をあわせて、おいしいあわびをたくさんとりました。

はる ゆき

吉浜小学校 二年 佐藤 春幸

むかしむかし、よしはまかいがんに、およぐのがへたくそな、はるゆきという男の子がやってきました。はるゆきは、海のちかくにすんでいるのに、およぐのがじょうずではありませんでした。

はるゆきが海を見ていると、きゆうにつよいかぜがふきました。はるゆきは、かぜにとばされ、海におちてしまいました。はるゆきはおよげません。はるゆきは、さけびました。

「だれかたすけてえ。」

はるゆきは、おぼれてしまいました。

その時、大きな魚がやってきて、おぼれているはるゆきをたすけて、きしまでつれて行ってくれました。はるゆきは、

「ありがとう魚くん。」

と言いました。大きな魚は、

「どういたしまして。」

と言いました。はるゆきは、

「魚くん、ぼくにおよぎを教えて。」

と、たのみました。大きな魚は、

「いいよ。」

と言いました。

それから、およぎのとつくんがはじまりました。大きな魚が、

「もうすこし足をのばしたほうがいいよ。」

と言いました。はるゆきは、何でも何どもれんしゅうしました。やつとのおよぎがうまくなりました。

およぎがうまくなったのはるゆきは、毎日のように海に行っておよぎました。そして、はるゆきは、およぎがじょうずなりようしになりました。

ぐうたろう

吉浜小学校 二年 小松 星河

むかしむかし、よしはまに、ぐうたろうとよばれるぐうたらな子どもがすんでいました。ぐうたろうは、

学校に行っていないませんでした。いつも家で、きつねのコンと犬のワンのすけとたのしそうにあそんでいました。

ある日、コンとワンのすけとぐうたろうがあそんでいると、お母さんが、ぐうたろうに言いました。

「あそんでいるなら学校に行きなさい。」

ぐうたろうは、

「はあい。」

と言いました。

でも、ぐうたろうは、つぎの日になっても学校へ行きませんでした。お母さんは、

「どうして学校に行かなかったの。」

と言って、ぐうたろうをしかりました。

つぎの日から、ぐうたろうは、お母さんにしかられるのがこわくなって、毎日学校にかようようになりました。

学校に行くと、ぐうたろうは、そうじ時間もきれいにそうじをしました。自分のべんきようどうぐをそろえおわると、友だちの分も手つだいました。ぐうたろうは、頭がいいだけでなく、はたらきものの男の子になりました。ぐうたろうは言いました。

「お母さんありがとう。あの時、お母さんがしかってくれなかったら、ぼくは、だめになっていたよ。」

ぐうたろうは、ぐうたらではなくなり、ぐうたろうとよばれなくなりました。

大きなつなみ

吉浜小学校 二年 佐藤 類

ぼくの名前は、るい。めんどくさがりやな二年生です。

とてもさむい日でした。お母さんは、いつものように、りょうりやせんたくをして、いそがしくはたらいっていました。お父さんは、しごとが休みで、その日は家にいました。お父さんはねむくなって、ひるねをしていました。ぼくは、ソファアの上でごろごろしていました。

その時、じなりのような大きな音がして、ガタガタガタガタとゆれはじめました。じしんです。長い長い、とても大きなじしんでした。外で

「つなみだ、つなみがくるぞ。」

と、だれかがさけんでいる声がしました。ぼくは、外に出て海の方を見ました。一分後、ほんとうにつなみがきました。今まで見たこともない大きななみが来るのが見えました。

「すごいつなみだね。」

ぼくがお母さんに言うとお母さんは、

「うん、すごいわ。」

と言ってじつと海の方を見ていました。ぼくは、こわくて足がとまり、うごくことができませんでした。

つなみは、たくさんさんの家やたてものをながしていききました。つなみがひいたあとには、がれきが、たくさんさんのこつていました。

その日から、ていでんになりました。つぎの日おきても、ていでんがつづいていました。ぼくは、びっくりしました。でんきがつかえないので何にもすることがありません。ひまになったぼくは、ごはんをたべた後、ねむくなったので、またねました。ていでんは、何日も何日もつづきました。

それから四年後。

町には、家やたてものがすこしずつたってきました。ぼくは、すこしあんしんしました。もう、つなみは、きてほしくない。

つなみがきたら、高いところにげたり、ひくいところにいるたら、はやくはしってすこしでもたかいところにげなくてはいけません。はやくにげるためには、うんどうをして体をきたえておかなくてはいけません。ぼくは、ぐうたらをやめました。

《小学生高学年部門》

カンナとりゅう

末崎小学校五年 小松 真菜

わたしは大船渡に住んでいる五年生のカンナ。友達のノアちゃんと学校帰りに変な物を見つけたの。

「うわー、なにこれー、ぬるぬるするー。」

「へえー、へびみたいで気持ち悪いー。」

ノアちゃんはすごいこうふんぎみ。

「ねー、うちね聞いたことあんだけど、五葉山のすごい奥に竜らしきものがあるんだって。おじいちゃんから聞いたの。でも、誰もそこに行ったことないらしい。」

「じゃあ、どうして、ノアちゃんのおじいちゃんが？」

「ずっと昔の話だよ。本当かどうかわからない。」

そのへびみたいな生き物は、わたしが家で飼うことにした。名前はりゅうちゃんにした。

ある日の夜、時こくはもうすぐ十一時。

「そろそろねなくちゃ。おやすみー。また、あつした。」

そう言いながら部屋の電気を消そうとすると、《まつ、まててください。まだ消さないでください》という声。

「ん？だれかいの？」

「ぼくです。りゅうですー。」

「キヤー、りゅうがしゃべったー。」

わたしは、びっくりして思わず悲鳴をあげちゃった。すると、お母さんがかんかんになつて二階に上がった。きた。

「カンナ、まだ起きてたの。もうねなさい。」

「まつて、お母さん。りゅうがしゃべったの。」

「そんなのどうでもいいでしょ。もうねなさい。」

「うん・・・。」

しかたなくねようとしたら、また、声が聞こえた。

「ぼく、五葉山に今すぐ行かないといけないんです。」

「だめよ。夜は行けないの。」

「お願いします。行かせてください。」

「だめ。」

そう言つて、電気を消したわたしは深いねむりについた。

翌日、目を覚ましたら、めずらしくりゅうが起きていた。

「りゅうちゃん、よくねれたー？」

「ねているひまなんかありません。」

「じゃあ、十一時から朝までずーっと起きていたっていうこと。」

話を聞いて、わたしは、りゅうと五葉山に向かうこ

とを決めた。外に出るとやわらかいもくもくの雲があり、青い青い空が広がっていた。わたしは、りゅうを自転車のかごに入れ走り出した。五葉山に向かって必死に自転車をこいだ。

「えっと、五葉山、五葉山・・・あった。こっちに行けば五葉山よ、りゅう。」

と話しかけたとき、りゅうは全身を小さく丸めてかごの中にうずくまっていた。

「りゅう、りゅう、だいじょうぶ!!」

すると、りゅうが、

「すみません。ねむくてねむくて、つい。」

「あなたって、本当に伝説の竜なの？」

「それは・・・」

りゅうが言いかけたとき、町じゅうが大きな音に包まれた。ゴゴゴゴゴ、ゴロゴロゴロゴロ、ドッカーン。地しんです。地しんがきたのです。時計を見ると時こくは午後二時四十六分。

「はやく行きましょう。」

と、りゅうが言った。同時にけたたましいサイレンが鳴り響いた。《高台に逃げてください》《みんなはやく逃げろー》《津波がくるぞー》《周りから色々な叫び声が聞こえてきた。わたしが海に目をやると、海は真っ黒になっていた。》

「もう、ここまできたら五葉山に行くしかない。」

「そうですね。」

わたしとりゅうは、また五葉山に向けて走り出した。とちゅうにとびらの開いたお店でねこを見つけた。友達、しゅんの家のねこだ。とりあえず自転車のかごに入れた。とにかく、いそがなくちゃ。

「行くよ。りゅう。」

「はい。」

わたしとりゅうとねこは、五葉山に向けてまた走り出した。そして、とうとう五葉山の前に来た。それから、どんどん、どんどん山の奥の方に入って行った。見たことのない景色に包まれた場所に着いた。そのとき、りゅうが、

「お母さん、ただいま。お客さん連れて来たよ。」

と大きな声を出した。そこに、大きな大きな竜があらわれ、こちらを見ていた。

「こんにちは。」

勇気を出して、わたしはあいさつをした。すると、

「りゅうを送ってくれてありがとう。この子の本当の名前はクリルです。」

不思議な気持ちで話を聞いていると、お母さん竜がわたしに言った。

「カンナさん、お礼に一つ願い事をかなえてあげまし

よう。何がいいですか。」

わたしは、言った。

「え、えっと、津波と地しんをなかったことにしても
ええませんか。」

「いいでしょう。すてきな願い事ですね。」

そして、クリルのお母さんがじゅもんをとえ出し
た。《クニノカオリ・・・クニノウミ・・・はくつ》
すると、願いがかない、幸せいっぱいのもとの町にも
どりました。

「クリルのお母さんありがとう。」

「いいえ、いいのです。さようならカンナさん。」

「カンナさん、今までありがとうです。」

目が覚めると、わたしは家の玄関前にいた。

クリルありがとう。クリルのお母さんありがとう。

みんなありがとう。また会おうね。さようなら。

ひろしの魚嫌い

越喜来小学校五年 富澤 舜基

ここは大船渡。海が近くにあるので、漁業がとて
もさかんで、おいしい魚がたくさんとれる町です。

そんな町の中にある大金持ちの家にひろしという男

の子が住んでいました。この家のお母さんは健康を第
一に考える人で、毎日魚料理が出ます。しかし、ひろ
しは、魚が大嫌いで、いつも、

「ドンコは骨だらけだから嫌だ。」

「サンマは苦いから嫌だ。」

「マンボウは歯ごたえが悪くて嫌だ。」

とご飯に魚が出てくると、ひろしはいつも文句を言
います。毎日魚は生ゴミ入れにどんどん入っていきます。

ある日、ひろしのお母さんがびっくりしました。一
メートルくらい積んでいた台所の魚が全部なくなっ
てしまうという不思議なことが起きて時間わりをチェ
ックしようとしたランドセルを開けたとき、昨日なくな
った魚の生ゴミが、ドドドとこぼれてきました。ひろ
しはびっくりして、しりもちをつきました。しかたな
いので、もう一つのランドセルに道具を入れました。
この日の朝ご飯はサンマの塩焼きが出ました。もちろ
んひろしは食べないで学校に行きました。しかし二時
間目の体育の授業で二周走をしている時にひろしはた
おれてしまいました。その時ひろしは、こんな夢を見
ていました。

ドンコとサンマが話をしていました。

「ひろしって子さ、本当に魚を食べないよね。」とド
ンコが言いました。

「そうだよ。おらの苦いところは栄養がたくさん入っているのに。」

とさんまもおこっています。その話を聞いてひろしは、少し反省しました。でも魚を食べたい、という気持ちにはなれませんでした。

ひろしが歩いていると、パトカーの形をした船からマンボウが下りてきて、

「ひろし君を魚全然食べない罪でたいほする。」と言いました。そして「イカうまいで署」というけいさつ署に連れて行かれ、イカめし刑事の取り調べを受けました。

「魚をどうして食べなかったんですか。」

とイカめし刑事が聞くと、ひろしは、

「おいしくないからです。」

と答えました。

「おいしくないのも分かるけど、ちゃんと食べないと病気になるやすくなったり、骨がじょうぶにならずにけがをしやすくなって体にすごくよくないんだ。」

「ごめんなさい。」

とひろしは、イカめし刑事にあやまりました。するとイカめし刑事は、

「本当は、懲役二年と言いたところだけど、一ヶ月にしてあげるよ。」

と言いました。ひろしは、声を上げて、喜びました。しかし、

「そのかわり、朝昼晩毎日ご飯は魚だけ。」

と言われてしまいました。その言葉を聞いたとたんひろしは言葉を失ってしまいました。それからひろしは刑務所に送られ、一ヶ月ろうやで過ごすことになりました。一日目の朝ご飯はサンマの塩焼きでした。鼻をつまんで、食べようとすると、それを見ていたイカめし刑事が、

「ちゃんと食べないと懲役一年にのばしちゃうよ。」

と言ったので、ひろしは、顔を真っ赤にしながら、がんばって食べました。昼ご飯はマンボウのさしみでしたが、歯ごたえを気にしないで、ばくばく食べました。

夜ご飯は一番嫌いなドンコのみそ汁でした。これが何日も続きました。しかし、ひろしは、

「ドンコだけは。ドンコだけは。」

と、ドンコの骨だけでなく、ドンコ自体がどんどん嫌いになっていきました。それはろうや生活が始まって、三日目の夜にこんな夢を見たからです。

目が覚めると、ひろしは、小さな鳥かごの中にいました。かごの外には、コックさんのぼうしをかぶったドンコが何か料理を作っていました。その様子を見ているうちに、ひろしが鳥かごからつまみ出されて、あ

ら汁にされてしまいました。そして、クラスのみんなや先生が、ひろしをどんどん食べ、あら汁がなくなってしまうというこわい夢でした。その日から八日後は、体を焼かれて、塩焼きにされたり、十日後には、体を切り刻まれ、さしみにされる夢を見たりするなど、どんどんエスカレートしていきました。こまったひろしはこの夢のことをイカめし刑事に話すと、

「ドンコをきちんと食べないからだよ。」
と言われました。

それからひろしはがんばって、骨を取ってもらって食べられるようになりました。一週間後には自分で骨を取って一口食べられるようになりました。一ヶ月間がたつて、ひろしは出所した時、目の前が真っ暗になりました。

目が覚めた時、ひろしは大船渡市内の病院のベッドの上で点滴をされていました。病院のお医者さんには、「あのまま寝ていたら大変な病気になっていたかもしれないよ。」

と言われたので、それを聞いて、ひろしはびっくりしました。

しばらくしてから病院を退院し、家に帰りました。退院したので、テーブルの上にはひろしの好きなものがたくさんありました。その中にはドンコのみそ汁も。

お母さんには、

「ひろしは、食べなくてもいいからね。」

と言われましたが、自然とひろしはパクパク食べられるようになっていました。食べられるどころか、大好きになっていたのです。

あのたおれた時以来、ひろしはあの夢をもう一度見ることはありませんでした。大嫌いだっただんこも、それ以外の魚もすべて平気で食べられるようになり、たおれることも、家の生ごみ入れが魚でいっぱいになることもなくなりました。そしてひろしは、栄養がたくさん入っている新鮮な大船渡の魚を食べて元気になり、テストでいい点数を取れるようになりました。こうしてひろしがあの時の夢を忘れることは一生ありませんでした。

ヒマワリがくれた夏

越喜来小学校五年 神津 凜

ここは、自然豊かな越喜来。ぼくは、一貴だ。越喜来の山は、緑あふれ、すき通った海は小さく波を立てている。そんなのどかな町にあるうわさが流れ出した。昔、何人もの人が夏虫山という山でお城を見たという。

しかし次の日、お城は、消えてしまったらしい。どうやらお城は、咲いたばかりのひまわりが散り終わるまでの間だけしか見えないという。

ぼうけん好きのぼくは、仲良しの大翔、真樹を連れて夏虫山に向かった。みんなのリュックには、ノートとペン、カメラ、かいちゅう電灯が入っている。ぼくだけは、大のお気に入り「大！迷宮」という本も持ってきた。ぼうけんには、やっぱり宝の地図が必要だからだ。ああ、ワクワクするな。

ぼくたちは、自転車を勢いよくこいで夏虫山に到着した。しかし、そこにはお城はなかった。ただ、越喜来のきれいな景色が広がっているだけだった。

「やっぱり、ただのうわさだったんだよ。」

と真樹が言った。がっかりしてぼくは夏虫山にぐるりと背を向け、歩き出した。その時、ちょうど咲きそうだったひまわりがキラキラと光をあびて咲き始めた。真っ黄色の花びらがとてもきれいに輝いている。それと同時に大翔の大きい声がそこら中にひびきわたった。びっくりしてふり返ると、なんとそこに、和風の大きなお城が建っていた。

「お城発見だ！」

ぼくらは思いつきりさけんだ。

「本当にあつたんだー。」

ぼくはびっくりしたのと興奮で、むねがワクワクしていた。そして中へ入ろうとしたが、周りがほりで囲まれている。下は深そうな池になっていて、落ちたら上がってこれるそうにない。周りには渡る橋もかかっていない。

「どうすればいいんだよ。」

と大翔と真樹がぶつぶつ言い始めた。その時フツと白いかげが動いた。そしてもう一つのひまわりがキラキラと輝いて花を広げた時、真っ白な橋が入り口へ向かってまっすぐにかかった。三人でおそろおそろその橋を渡ってお城の入り口にたどり着いた。ぼくたちはドキドキとワクワクが入りまじった気持ちでドアに手をかけ、ゆっくりと大きな扉を開いた。

中に入ると、広いごてんのような所に出た。真っ暗だったので、かいちゅう電灯をつけて奥へ進んだ。ほこりをかぶっているのに、そこにあるものは、みんなキラキラと光っている。

「すげー。」

と声を上げている時、フツと足元で白い物がぼくには見えた。

「おっ、おぼけ？」

と言った時、今度は目の前にボウツと白い物がうかんだ。三人はびっくりしてさけんだ。

すると、

「お婆けではないぞ。」

と声がした。怖くて泣きそうだったけど、電灯を声がる方へ当ててみると、ちよこんと白いキツネが座っていた。小さくて毛は真っ白で、よく見ると目は青く輝いていた。大翔はキツネに安心したが、真樹は怖くてふるえていた。そしてよく考えるとキツネがしゃべったことにもびつくりして三人でまたさけんでしまった。キツネはめいわくそうな顔をしていたので、ぼくはあわてて口をふさいでキツネに何度もあやまった。「私はお婆けでもキツネでもない。そのへんのヤツといっしょにしないでくれ。私はコウという。」とコウはえらそうな口調でしゃべった。

「どうしてここにいるの？」

とおそろおそろ真樹がコウに話しかけた。そこでコウから話を聞かされた。自分はこのお城が建っていた時に生きていた古い生き物であること、今はひとりぼっちだということ、またそれにはわけがあること。ぼくは何だかコウがかわいそうに思えてきた。大翔がわけを聞くと、コウはコホンとせきばらいをして話し始めた。

「私は古い血を引く動物であり、その中でしゃべることができたのは私だけだった。そのせいで私はきらわ

れていた。ある晩、私の命より大事な物がぬすまれた。それは大切な物が入っているペンダントだ。ぬすんだのは、私のことを特にきらっていたヤツだ。そいつは、そのペンダントを、ある城へと物を運ぶための馬車に投げ込んだ。私はそれを取りもどすために、めしつかいとしてその城に仕え、今もこうしているのだ。もう何百年も前の話だ。私以外はもういなくなり、城も古くなりほろびてしまった。私は一人生き残りひまわりが咲く間、チャンス伺い、ペンダントを探しているのだ。」

最後は今にも泣きそうになりながらコウは話した。ぼくも真樹も大翔もみんなコウをかわいそうに思った。そしてぼくらは立ち上がって少しカッコつけながらコウに言った。

「その命より大事なペンダント、おれらが見つけてやるよ。」

しかし、お城はひまわりが散るまで。ひまわりの花びらはあと十枚しかない。

「ペンダントはひみつの間にある。」

とコウが言ったので、ひみつの間を見つけようと一生けん命探し始めた。しかし、いくら探してもお城の中は広くて見つからない。そこでぼくは、リュックの中に入れておいた「大！迷宮」の本を開いた。よく見る

と、その中のあるページとこのお城の中がコピーされたように全ていつちしていたのだ。すぐにみんなに知らせて、そのページを見ながらひみつの間を探した。どうやらその場所は、未来の間にあるかくし扉の向こうにあるということがわかった。ぼくらは本をたよりにどんどん進んだ。

ようやく未来の間にたどりついた。そこはぼくの想像していた未来の間とは全くちがっていた。雲の上にいるようにフワフワしていて、とてもきれいな虹がかかっている所だと思っていた。しかし、そこには千冊、いや一万冊をこえるくらいの本がかべ一面にあった。どこを見ても本。ただ広い部屋の真ん中には古びれた机があつて、周りにはかくし扉のようなものは見つからなかった。ここまで休みなく探し続けていた三人といっぴきはつかれて寝てしまった。そうしている内にひまわりの花びらは五枚になっていた。

何時間たつただろうか。もう空が赤く染まっていた。ぼくはハッとして起き上がると、他のみんなを起こした。窓からひまわりを見ると花びらが二枚だけ。急がないと時間がない。

「あっ！」

大翔が声を高くして言った。本だなどよく似た扉を見つけたのだ。ぼくたちは扉を開け、こんなに速く走っ

たことがないと思うくらい走った。いくつも続く扉の最後を開けると、ひみつの間にたどりついた。広く、うす暗くジメジメしていたが、ぼくはみんなよりも人一倍、一生けん命に探した。怖がりなのに不思議と怖さは感じなかった。でも、そこにはペンダントがたくさんあつてどれがコウの物かは全くわからない。ずつと探し続けていたぼくはめまいがして座りこんでしまった。すると、ぼくの目の前にあつた水晶がキラキラと光を放ち、何かを映し出していた。それは小さくて、手作りのようなペンダントだった。ビーズのかわりに葉っぱや花、そしてクルミがかざりとしてつけられていた。クルミの中にはコウとその家族、友達が写っている古い写真が入っていた。そのあとに水晶は外にあるひまわりを映した。ひまわりの花びらは残り一枚。探しつかれた真樹たちは寝ていて起こそうとしたけれど水晶のことを話している時間はない。ぼくは一人で必死になって水晶に映し出されたペンダントを探した。すると、本だなの上に小さなオルゴールを見つけた。開けてみると、全く同じようなペンダントが入っていた。ぼくはオルゴールごと持って、大翔たちを急いで起こした。大翔たちは、

「さあまた探すぞ！」

などと言いながらねぼけていた。ぼくは笑った。そし

てペンダントを手にとって、そつとコウの首にかけてあげた。コウは涙目でぼくを見つめていた。

「お前ー起こせよ！」

と真樹と大翔が笑いながら言った。

「これがあれば未来の扉が開いて、みんなに会えるかもしれない。本当にありがとう。」

とコウはもう一度青い目を涙でぬらしながら何度も三人にお礼を言った。

その時、ゴゴゴゴとお城がゆれた。窓からあのひまわりを見ると、残り一枚の花びらが今にも落ちそうになっていた。それを見たぼくたちは急いでお城の外に出た。最後の花びらが落ちた時、夏虫山の木々たちが大きくゆれ、お城がどんどん消えていった。同時にお城の入り口に立っていたコウの姿もだんだんうすくなっていく。

「いろいろありがとう。きつとまた会おう。」

と言ったコウの笑顔が夏虫山の空へと静かに消えていった。

ぼくは家に帰って、この不思議な体験を家族に話した。するとおばあちゃんが、

「そういえば一貴が小さいころ大事に大事にしていたキツネのぬいぐるみがあったね。」

と言った。ぼくはおし入れの奥から大切な物をしまっ

ていた古い箱を取り出した。そつと開けてみると小さなキツネのぬいぐるみが出てきた。ちよつと汚れたその顔を見て、ぼくはびっくりした。それはコウにそっくりだった。

「あつ。」

よく見ると首にクルミのペンダントがかかっている。そのペンダントの中には一つぶのひまわりの種が入っていてキラキラと光っていた。

海の神の伝説

越喜来小学校六年 三浦 環

崎浜の海のお話です。

むかし、むかし、崎浜の海には神様がいて、人々にカゼ（うに）、ホタテ、アワビ、ホヤ、カキ、ワカメ、コンブ、フノリ、マツモ、タコ、カツオ、マグロ、ヒラメ、カレイ、イカ、スルメ、タナゴ、アジ、アイナメなど、たくさんの海の幸をとらせてくれ、人々の暮らしを豊かにしてくれていました。

しかし、崎浜の海を汚す人が出てきました。ごみを捨てたり、海草や魚をとるだけとって、海に感謝をしない人が増えたりしました。魚などをとりすぎてしま

うので、崎浜の海は魚や海草が少なくなっていきました。しかしそれでも、崎浜の人々は海を汚し、魚や海草をとるだけという生活をくり返していました。

とうとう、海の神の怒りにふれてしまいました。海の神は、

「なぜ、海を荒らしてばかりで、感謝しないのだ。こうなつては、二度と崎浜の海で漁をさせるわけにはいかん！」

と怒りを爆発させ、一切何もとれなくさせてしまいました。

崎浜の人々は、困り果ててしまいました。何もとれなくなった海を、みんなじいっと見つめていました。そして、自分達のしたことを反省し合いました。

「おらは、海にごみを捨ててしまった。海をそまつにしてみました。」

「おれは、魚や海草をとるだけとつて、海に感謝をしていなかった。今では後悔している。」

「このままでは、生活できなくなってしまう。」

「どうしよう。」

と、みんなが落ち込んでいるときに、一人の人がこう言いました。

「それなら、これからは海にごみを捨てずに、海に感謝しながら生活しよう。」

「そうだな。確かにおれたちは海をそまつにしてしまった。改めればいいのだ。」

その後、崎浜のほとんどの人たちは、海を大切にすることを始めました。でも、まだ、何人かは海を大切にしない人がいました。自分だけが、たくさん魚がとれると、かげで喜んでいました。海の神様はますます怒つて、海に捨てられていたごみを集めて、大きな鬼を作り、崎浜の町を荒らさせました。

崎浜の人々は驚き、恐れしました。しかし、人々は、自分達の町を絶対に荒らさせないという強い気持ちで、その鬼に立ち向かいました。苦しい戦いでしたが、最後まで海を大切にできなかった人々も心を入れ替えて、心一つにして、鬼に立ち向かい、やつとの事で鬼を倒しました。人々は、無事に崎浜の海と町を守りました。

海の神はそれを見て、

「これなら大丈夫だ。崎浜の人たちよ。大切なことは、海や山に感謝し、力を合わせて生活することなんじや。これからも、このことを忘れるのではないぞ。」

こうして、崎浜の人々に豊かな暮らしが戻って来ました。

ところが、予想もしなかったことが起こりました。それは、何とあの宇宙から、侵略者が来てしまったの

です。侵略者は、

「キョウハ、サキハマノウミノカミヲオシニキタ。キョウデ、オマエタチノユタカナセイカツモオワリダ。コノスバラシイウミトダイチハ、スベテオレタチモノダ。」

と言いました。宇宙人の威力はものすごく、さすがの海の神も太刀打ちできません。

そんな時、崎浜の七人の勇者が立ち上がりました。「よくも、私たちの海の神を！こうなったら打ちのめすしかない。」

「おい、宇宙人。おれたちとこの浜で勝負しよう。」

宇宙からの侵略者と、七人の勇者たちとの大決戦が始まりました。七人の勇者たちは、宇宙人に一斉に飛びかかりました。しかし、宇宙人のバリアは強く、一気にはね飛ばされました。

「これは強い。いくらおれたちががんばっても、勝てそうにない。」

とあきらめかけたその瞬間、一人の勇者が

「あつ！確か奥の宮に困ったときに使う呪文が書かれた紙が隠されていたような…。今こそその呪文を使う時だ。」

急いで奥の宮に行き、隠された呪文を探しました。すると、奥の宮の観音様の足下の引き出しに、白い紙が

あり、よく見ると、宇宙人を倒す呪文が書いてありました。勇者は急いで戻り、他の勇者たちに伝えました。そして、声を合わせ、動きもそろえ、唱えました。

「ドゥンサァサァ、ドゥンサァサァ、ドンドコドン。」
「あみくだ、あみくだ」 「デンデコデコデン、デコデコデン」などと、呪文を言いながら、再び飛びかかりました。すると宇宙人が、

「うわあ！やめてくれ！その呪文はやめてくれ。」と言いました。宇宙人の威力がだんだん弱くなっていき、ついに宇宙人を倒しました。七人の勇者たちのおかげで、崎浜の海の神はよみがえりました。

「やった。海の神をお守りしたぞ。これで、また、たくさんの海の幸をとることができるぞ。七人の勇者のおかげだ。本当にありがとう。」

崎浜の人たちは、大喜びして、みんなで祭りをして海の神を祭ることにしました。

そのお祭りは、現在も五年祭という名で四年に一度行われているそうです。また、七人の勇者と侵略者との戦いをたたえて、崎浜の剣舞は始まったそうです。

きれいな海を取り戻した姫と王子

越喜来小学校六年 岡澤 風華

ここは、さんりくの海に囲まれた半島。この半島には、海ひめという姫が住んでいました。海ひめは、さんりくの海が大好きでした。

ある日海ひめは、海に入ってみることにしました。海に入ると、海ひめは驚きました。

「きれい！こんなにきれいだと思っていなかったわ。わかめのカーテンに、さんまの道。

かがやくほたて。」

家来たちも海ひめも、その光景に見とれてしまいました。その日から、海ひめは毎日潜るようになりました。

そんなある日、城で海に潜る用意をしていると、ガタガタと地面が大きくゆれました。

海ひめは足が震えて動けませんでした。

「津波だ！避難しろ！早く姫を連れて高台に逃げろ！」と、家来が叫びました。海ひめが大きな声で「わたし

はここよ。早くみんな城の上に逃げるのよ。」

と言うと、すぐに家来がかけつけ、みんなを城の一番高い所に連れて行きました。みんなは、城の一番高い所まで逃げました。城の前の庭ぎりぎりの所まで、波がきていました。

海ひめは、落ち着いてみんなに呼びかけました。

「みんな、食料はあるわ。ふとん、服、水もあるわ。安心して。持ってきたふとんを真ん中に置いて、そこにみんなが集まるのよ。」

家来たちは急いでふとんをしき、みんなが集まりました。

一人、海を監視していた家来が、

「ひめ・海が・。」

海ひめが急いでかけつけると、いつも青く澄んでいる海が、黒くにごってうずまいていました。

「どうして、どうして、こんなことになったの。わたしの大好きな海が・。」

その黒い海の光景は、海ひめの心の傷になって、いつまでも残っていました。

それから、何ヶ月かたったある日、海ひめに手紙が届きました。差出人は、あかねという王子でした。

「この間の地震は、とても大変でしたね。ぼくは西の城の王子です。海ひめさんは海が大好きだと、母に聞きました。ぼくは海を見たことがあります。海はきれいですか。どんな生き物が住んでいますか。もしよかったら、教えて下さい。あかね王子より」と書かれました。海ひめは、さっそく返事を書いてみました。

「お手紙ありがとうございます。海はとても きれいです。私は、特に朝の海が大好きです。写真を送るので、見てください。それから、海には、さんまやほたて、あわび、わかめなどたくさんいますよ。今は、津波のためにきれいではありませんけど、いつかきっと元に戻ります。その時は、どうぞ遊びに来てください。海ひめより」

海ひめは、さんりくの海の事をいっぱい書きました。それから、何日かたつと、あかね王子から電話がきました。

「返事ありがとうございます。海の写真がとてもすてきでした。ぜひ、海が見てみたいので、あさって、直接お城に行ってもいいですか。」

海ひめは急な話で驚きましたが、特に予定もないので、OKしました。でも、きれいな海がみたいという王子が、今の海を見てどう思うのか、ちよつと心配になりました。あさっての朝八時着で、話がまとまりました。

海ひめは、心配しながらもわくわくして待ちました。あかね王子はどんな人だろう、優しいかなあ、などと考えました。

当日、海ひめは、あかね王子が到着するのを、わくわくして待ちました。いよいよ王子の到着です。

「こんにちは。」あかね王子の横には、何十人もの家

来が立っていました。

「今日は、家来たち同士で会議してもらうから、私たちは一緒に遊びましょう。」

「何をしましょう。」

「絵でも描きましょう。」

海ひめはうなずいて、津波の来る前の海の絵を描きました。絵が完成すると、海ひめは家来に頼んで額に入れてもらいました。それを見た王子は、とても喜んで、ぜひ海を直接見てみたいと言いました。

「津波が来てからは、まだ、海はすっかりきれいになつていません。でも、あかね王子が、ぜひ海を見たいというのなら、海の見える所でお昼にしましょう。ピクニックです。」

たくさんの家来たちと一緒にピクニックに出かけました。そこは、海ひめの大好きな海が見える野原でした。みんなでお弁当を食べていると、あかね王子が言いました。

「海の色はとてもきれいなのに、浜辺にがれきや岩があつて残念です。あれを取り除けば、きっと海ひめさんが絵に描いてくれたような、きれいな海にもどるでしょうに。」

「そうだ、私の家来たちと海ひめさんの家来たちで、力を合わせてがれきを片付けましょう。必ず、前のき

れいな海にすることができはるはずです。」

海ひめは、それを聞いて叫びました。

「それよ！とつてもいい考えだわ、あかね王子。あなたの家来と私の家来で協力して、この海をきれいにしましょう。」

しかし、家来たちはびっくりした表情で、海ひめを見て言いました。

「あの、それにはものすごくお金がかかります。お金がなければ、機械を買えません。」王子は答えました。

「それは心配ありません。機械は、ぼくのお城にたくさんあります。それを運んできて、海をきれいにすればいい。たくさんの人で力を合わせれば、ぜったいできますよ。あきらめないことが大事です。」

すぐに、海ひめの家来もあかね王子の家来と一緒にあかね王子の城に向かいました。連絡がいていたのか、お城には、もう、たくさん機械が用意されていました。急いで大きなトラックに積んで、海ひめの城へ戻ると、着く頃にはもう、すっかり暗くなっていました。

次の日、朝から海の清掃作業に取りかかりました。たくさん家来の協力とたくさん機械のおかげで、作業ははかどり、夕方にはすっかりきれいになりました。

「なんか、なつかしい。やつときれいな海に戻ったわ。」

「これがあなたの絵にあった海ですね。絵や写真の通りです。本当にきれいです。ぼくにも、海のすばらしさが分かりました。」

たくさん家来たちも、その海をながめ、みんな一緒に喜び合いました。

「今日はパーティーよ。きれいになった海を祝って。」みんなでごちそうを食べて、きれいになった海を楽しく祝いました。

あの日の想い

盛小学校六年 新沼 由唯

二〇一一年三月一日の大震災から、三年という月日が流れた。あれから三年たって、ここ岩手県大船渡市の人々は、前を向いて進もうとしていた。その人々の想いは、とても力強いものだった。そして、たくさん所から復興支援を受け、大船渡市は、変わりつつあった。津波で辺り一面が平地になったその街には、新しい住宅や仮設の商店街ができた。そんなみんなの活躍を私は、テレビで見てもほらしく思っていた。理由は、何といってもいろんな人々が向き合い、支え合っていることだった。不思議と心が温まるのだ。

支援をしてくれたのは、日本の人々だけではない。アメリカ人などの外国の人々の協力もあった。私の父も外国の人々と次々と知り合っていた。その後、私も少しずつ外国の人々と仲良くなっていた。今では、お話もできるようになっていて。初めは不安だった。だけどなぜだろう。その人たちは、初対面なのにえんりよなく笑顔で話しかけてくれた。

そんなあの震災から三年たった今でも、私は、その時経験したことが忘れられない。もちろんそれは、無事に生き残った人たちや友達も同じだと思う。

最近、父は、パソコンで震災当日の様子が映っているムービーを私に見せてくれた。そのムービーには、とても悲しい光景が映し出されていた。泣きさけぶ子どもや、男の人のわめく声、母親の助けを求めている声、それらの声を聞くだけで、私の目からなみだがあふれ出してくる。

「どうして、あんな風にならなければならなかったんだろう。」

ムービーを見たとき、そう思いながら私は泣いていた。

私は、三年前のあのとき、まだ小学二年生だった。私が住んでいる街は、大船渡市盛町。大船渡マイヤやデイリーポートなど、さまざまな大型店が建ちなら

んでいた、大船渡の街。この街は、とても豊かな街で、人々はいつも笑顔でにこにこしていた。夏には、毎年さまざまなイベントで盛り上がっていた。夜に打ち上げる花火は、格別なものだった。

しかし、三学期に「お楽しみ会」のかざりを作って楽しんでいたその時だった。

「ゴゴゴゴゴ・・・。」

とつぜん地なりの音が聞こえた。誰かが、

「地震だ！」

とさけぶと、みんなはいっせいにつくえの下にかくれた。すると、担任の先生がもどって来た。先生は、あわててまどやドアを開けた。そうしていると、地震のゆれは、今まで経験したことのないような強さになっていった。

「何だ、このゆれは。」

私がそう思っていた時、気がつくと停電になっていた。

三分後、ゆれがやっとおさまり、みんなは、つくえから出るとすぐ校庭にひなんした。あたりは、いつもとはふんいきがちがっていて、とてもザワザワしていた。わたしは、頭が回らなくなるくらいとまどっていた。

「さっきのあのゆれは、いったい・・・。」

すると、学校近くの墓地の方から大ぜいの人たちが

ひなんしてきた。中にはけがをしたような人もいた。それを見て、私は少しぞっとした。その時校長先生が、みんなにこう言った。

「津波警報が出ていますが、みなさん落ち着いて下さい！」

その言葉を聞いたしゅん間、ますますぞっとしてきてこんなことを考えてしまった。

「街は助からないのかな。お父さんの会社は海の近くで、お母さんの仕事場も海に近い。どうしよう！このままじゃ・・・。」

それを考えるだけで、とてもこわい気がした。

それから何分かつと、ようやくお母さんと妹が迎えに来てくれた。お母さんと妹の顔を見ると、少し安心したような気がした。あとから聞いてみると、お母さんは、その時早く家に帰っていたので、地震が来たときにあわてて昼寝をしていた私の妹をだき上げたそう。そして、くつもはずかに外に出てみると、水が流れてきて、それは階段まで来たということだ。

家に向かっていると、おばあちゃんもむかえに来てくれていた。あとは、お父さんだけだ・・・。

家に着いてしばらくすると、お父さんも帰ってきた。

私は、みんな無事だったので、とても安心した。

夜になると、停電になった家は、真っ暗になった。

私たちは、その夜、蔵ハウスへとひなんしに行った。蔵ハウスにいと、友だちもひなんして来た。その友だちと私はたくさん話した。すると私の気分は、少し落ち着いていった。しかし地震は、またくり返しくり返しやってくる。そのたびに夜はともねむれなくなっていく。そんな三日間をみんなで過ごした。

あの日から二、三か月たったある日、私に新たな出会いがあった。その出会いの相手は、クリスというアメリカの人だった。この大船渡市のためにきてくれたのだというが、私はびっくりした。なぜかという、外国人を紹介されてこうして対面するなんて、今まで私がおくってきた生活では、とてもめずらしくてありえないような出来事だったからだ。でも、話しているうちに慣れてきて、少しだけ「友だち」に近づいたような気がした。そうしていくうちに、どんどん外国の人々がやって来て、そのたびに友だちになっていったのだった。

そんないろいろな出会いをきっかけにして、私はこんな夢を持つようにもなった。

「私は、マンガで『平和』を伝えていく大人になりたい。」

私は、あの出会いで心を成長させることができた。理解したことは、「希望を信じること。」と「決してあ

きらめないこと。」これらが、きつとこれからの人たちの心の支えになれるかもしれない。わたしはそう思っている。津波ですべてをうばわれてしまった街も、いつかはよみがえる。私のこれからの平和への願いはただ一つ。それは、「下を向かず、前を向いていくこと。」この言葉は、他の人たちにも伝えたい。遠くでこの街よりひどくひがいを受けた街にもそれを伝えたくて、私は大人になってもずっとずっといつまでも言い伝えたい。

三年たった今、私は、いつの間にか六年生になっていた。それでも、平和であるようにという願いは、今でも変わっていない。あの三年前のことを思い出すたびに、私は何となく、

「みんなが支え合ってきたから、この大船渡市もほとんどおりの街になって来たのかもな。あのころ、一体私たちはどうなるんだって思ったけど、友だちやさまざまな人との出会いがあって、みんなあきらめることなく前を向いて歩き続けたんだな。」

と、心の中でつぶやいていた。自分では、そんなことを思っているが、いつか周りの友達もそのようなことも考えてくれればなと、ときどき思う。

私は、五年生のころからこの「お話大賞」に取り組んでいる。ここで表現することで平和について少しでも伝えていきたいなと思っている。前回書いた物語の題名は、「サニーとまほうのリボンの、大船渡市をたずねて」だった。内容は、「サニーという名前の子犬が、首輪としてついているリボンと旅に出る。行先は過去か未来のどちらかだったが、間違えて現在の大船渡の街に来て、希望を失った人々や街、動物たちに新たな夢と希望と勇気をあたえた。」という物語だった。どのように表現しようかなやんだが、自分の経験を思い出したり、テレビ番組「おぼんです岩手」の「あの日のあの時」のコーナーなどで出てきた人たちのあの日の想いなどを見たりしていると、アイディアがふくらんでいき、鉛筆を持って知らないうちに手を動かしているように感じた。この物語が完成した時、自分の力をこの文に表わすだけで発揮することができたのかもしれない。と少しだけ思った。

今、こんな風にして書いているこの文章には、自分の想いがしつかりつまっているかどうか不安な感じだ。きつちりとした自分自身のその想いで書き表わせていたらいいんだけど・・・文章でなら、きつと伝えられるはずだ。私は、今そんな風に自分の心に言い聞かせているのかもしれない。

今回も、この文章で私の想いをたくさんつづることができたのかな、と思っている。でもひよつとしたら、まだ少しだけ物足りない。だから、これからも文章を書くことで「あの日の想い」というものをどんどん伝えていきたい。その想いを、今後友だちにも教えてあげたいと思っている。

私は、信じたい。あの豊かだった街を再生させるようになる日を、あの笑顔に満ちあふれていた街を、前を向いて歩く人々の姿を。私もみんなで力を合わせて実現させていきたいと思う。

アイナメ兄弟のすえっこの話

大船渡北小学校六年 浦島 帆乃佳

その夜ぼくは夢を見た。

「セイ、だれになんといわれようと、そのままいいんだよ。」

お母さんに言われた。

「セイ、なにがあっても立ち直るんだぞ。」

お父さんに言われた。この言葉、小さいときから言われているんだよなあ……。昔はともおちつく言葉だったんだけど、最近は、なぜか逆にきずついてくる

んだよなあ……。

「おい、セイ！」

あつ、お兄ちゃんだ……。

「今からサッカーをするんだあ！でもボールにちょうどよい石がなくてなあ……。だからボールの代わりになつてくれ！」

「えっ……。？」

「別にいいよな、お兄ちゃんたちのためならやってくれるよなあ。」

「はっ、はい。」

ああ、こわかった、石なんて、そこらの岩場にいっぱいあるじゃないか！それなのに……。

「ほら行くぞ！ボール役！」

ああ、もうみんなやる気になっちゃてるよ。

「ブォーッッッ。」

貝の音になった。ああ、始まった。けられる。

「うあつ！」

そっか、夢だったのか……。

「朝ごはんだよー。」

あつ、お母さんが呼んでいる。

「はぁーい！」

まっつ、みんな速いよー。

「おあよう、今日も朝から元気だなあ……。あれっ、

セイは？」

お父さんが探している。

「まってー、まってー、まってー。」

ぼくは一生けん命さけんだ。やっとなつた。

「おはよう、セイ。」

「よう、のろまセイ、今日もビリだったなあ。」

ああ、またばかにされた・・・。

「さあ、新鮮なうちに食べましょう。」

「それでは、いただきます。」

またビリだった。まあ、もう慣れてるんだけどね・・・。

だいたいお兄ちゃんやお姉ちゃんは泳ぐの速いし多すぎなんだ！ぼくらアイナメ家族はお母さん、お父さん、そして、大ぜいのお兄ちゃん、お姉ちゃんとくらす大家族だ。きょうだいが多いせいかな、他の魚と比べたり、けんかが多い。その中でも一番下っぱのぼくは、みんなにばかにされる。

「ごちそうさまでした。」

バタバタバター・・・。もうみんないっちゃった。

「おいしい、みんなサッカーしようぜ。」

「よしやろう！」

サッカーか・・・やりたいな・・・勇気を出して、いってみよう。

「あの・・・、いっしょに、サッカーやっていいかな？」

「別にいいぞ！」

えっ、いつもは断るのに・・・。

「ボール役ならな！」

やっぱり・・・。そんな簡単にいれてくれるわけないよね。

それからぼくは一人で家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり、みんなとサッカーしなかったの？」

「うん・・・。」

「また、意地悪されたの？」

そのときぼくは、何も言えなかった。でも少したって、お母さんがぼくのとなりに来てくれた。だから話そうと思った。

「だってみんな小さいからって・・・ぼくをサッカーのボールにしようとするんだ、やりたくないから、言いたいけど、こわくて言えないんだ。」

思いきって言ってみた。そしたらスッキリした。そしてたらお母さんに言われた。

「セイ、セイは一人だけなんだから、そのままでもいいんだよ。」

ああ、またこの言葉だ・・・。もういやだ、がまんできない！

「もう、いつもなんだ！そのままでもいいっていい！」

るけど、ぼくはこのままがいやなんだ！なんでぼくだけ、小さいんだよ！」

ぼくは無我夢中で泳いだ。ずっとずっと泳いでいた。

「ここはどこだ・・・？」

気付いたときにはここがどこか、分らなくなっていた。でも、今は家に帰りたくない。

「セイー、セイー。」

お母さんだ。

「見つけた！」

ああ、みつかっちゃった・・・。

「せい、体が小さいわけ、教えてあげようかあ？」

「わけ・・・？」

「セイは、最後までずっと、たまごからかえらなかつた。心配していたら急に強い波がきた。だからお兄ちゃんとかたまごのセイをつれてにげた。でもたまごをおとしてしまったの、だからふかがおくれたの。」

そんな理由があったんだ・・・。

「分かったよ、ぼくはもう負けないよ！」

―次の日―

「朝ごはんだよー。」

あつ、お母さんが呼んでいる。

「はぁーい！」

あつ、行っちゃう・・・。はやく行かなくちゃ！

「やっとなついたらー。」

「おう！またビリだったなあー。」

また言われた・・・でも負けない！

「笑いたければ笑えよ。ぼくがおそいのは、みんなよりキレイに泳いでるからだもん。」

「・・・。」

やっとなついたら返せた、これからまたいじめられるかもしれない。でももう大丈夫、ぼくには大きな勇気があるから。だから何度でも言い返してみせるよ！

《中学生部門》

いちばん大好きな街

越喜来中学校一年 大上 萌衣

ひよんなことから大船渡町に引っ越してきた瑠香と香奈は、ある日散歩に出かけました。

道もわからないままどんどん進んでいくと、おじいさんが立っていました。瑠香達二人はそのおじいさんに大船渡の名所や名物などを聞いてみました。

「おじいさん、すみません。この辺りの名所や名物って何ですか。」

するとおじいさんは、

「わしは仙人っていうんだ。ただのじい様どはちげえんだ。ところであんだど、どこのわらすだ？」

と言いました。

それを聞いた留香は、

「あつ仙人さんでしたか。これはどうもすみませんでした。」

と素直に謝りました。しかし香奈は、なぜか怒って言いました。

「ちげえ？ところで？あんだど？わらす？こっちは真面目に聞いているのに、何で意味不明な言葉使う訳？意味がわかんないわ。ふざけるんじゃないよ。」

「いやあ、すまん、すまん。『ちげえ』つつうのは標準語で言えば『ちがう』っていう意味でな。『ところで』っていうのは…。」と仙人が続けようとすると留香は、

「あたしわかった！『ところで』っていうのは『ところで』『あんだど』は『あなたたち』『わらす』っていうのは『子供』っていう意味ですよね？」

と言いました。すると仙人は留香をほめました。

「いやあ、よくわがったなあ、あんだ。このぐれえわがってば、問題ねえ。」

留香が、

「ありがとうございます。」

とお礼を言っていると香奈がますます怒りながら言いました。

「何が『いやあ、すまん、すまん。』よ。そりやあさ、あたしたちが名前を言わなかったのは悪いけど、なんで質問を無視するの？。」

仙人は、

「はいはい。どうもすみませんでしたあつと。」と気を悪くして言いました。

「はあ？本当に反省してんのあんだ。何ふざけて…ムグッ。」

香奈は留香に口をふさがれ、代わりに留香が答えました。

「すみませんでした。仙人。そんなに気を悪くしないでください。私が留香で、妹が香奈っていいです。大船渡の名所や名物を教えていただけませんか。お願いします。」

すると仙人は、

「ああそうだったな。こごら辺の名所だの名物はあんだが自分達で探してみろ。」

と答えました。留香達二人は意味がわからず聞き返しました。

「自分達で探せってどういうことですか。」

仙人は、

「わしは空飛ぶ仙人じゃ。あんだ達を空さつれでつてけっから、空がら探してみろ。」

と言ひ、何やら呪文を唱え始めました。すると二人はにっこり笑つて言いました。

「なあんだ、そういうことだったのか。なんかさつきからふわふわ浮いてる気がしてたんだよねえ。」

「そういうことだったのね。イライラして損したわ。」
仙人が呪文を唱え終わると二人は空へ向かつて飛びました。

空へ着くと、景色がよく見えます。

「うわあ。とっても気持ちがいいわあ。景色もきれいだし。」

二人が声をそろえて言いました。すると仙人が近づいてきて言いました。

「どうだ？なんか見つかったが？」

二人は

「うん！」

と言つたあと、続けて、

「大船渡の名所は、空から見たこのきれいな景色！」
と言いました。すると仙人はにっこりして言いました。

「当たり前だ！よく見つけたなあ。それじゃ、帰してやるよ。」

それを聞いた二人は、

「待つて。教えてほしいの。お父さんとお母さんにも教えてあげたいんだけど、絶対に信じてくれないわ。」

「どうしたら信じてくれるか、教えて！お願い！」
と言いました。仙人は困りましたが、その後たった一つだけ教えてくれました。

「この、わしのカメラを使って写真をとれば、誰でも信じでくれっから。二人して一緒にとればいい。わしがとつてけっから。」

なんだか変なカメラでした。しかし、仙人の言う通りにしようと思い、写真をとってもらいました。二人はとつた写真を見ながら仙人に言いました。

「ありがとう仙人。今日はとっても楽しかった。本当にありがとう。」

「とっても楽しかったから、またいつか、遊びに来てもいいかしら？」

すると仙人は笑顔で、

「ああ、いつでもおいで。わしはいつでも、ここさ居っから。」

と答えました。

二人はうれしくてたまりません。笑顔で家にもどりました。

家に着くと、仙人に言われた通り、写真を見せなが

ら、

「お父さん、お母さん見て。今日散歩に行ったら仙人に会ってね。」

「仙人に大船渡の名所と名物を聞いたら、自分達で探しなさいって言われて…。」

と今日の出来事を話しました。するとお父さんが、
「それで分かったことはあるのか？」と聞き、お母さんが「その感想は？」と聞きました。「仙人がここら辺の方言を使っている、聞いてると落ち着くっていうことと、その方言をどんな時に使うかとか、方言の意味。」

と瑠香が答え、

「感想は、とっても楽しかったし、また行きたいなと思った。それで、大船渡が大好きになったよ。」
と香奈が答えました。そして二人で声を合わせて言いました。

「だから…。もう引越なんてしなくていいよ。あたし達、ここじゃなきゃ絶対にいやだし、それにもう、ここからはなれたくないもん。」

それを聞いたお父さんとお母さんは笑顔で、

「それは良かったわね。これからはもう引越はしないよ。それでここになれて、大船渡のみなさんと仲良くしようよ。」

と言いました。二人は、

「うん！」

と元気いっぱいに答えました。そして心の中で、

（仙人、ありがとう。おかげで大船渡が大好きになったよ。）

と言いました。

その夜家族で、どんな方言なのか教えたり、実際に使って会話してみたりと、にぎやかに過ごしました。

「あんだどこのわらすだべ。」

「オラはこの家のわらすだども。」

「あはは。お父さん上手。お母さんも。とっても上手だね。オラど、大船渡の人かと思ったぞ。」

きつと仙人も安心していることでしょう。だってこんなに、方言を覚えるのが早いんですもの。大船渡は、こんなに元気なまちだど！

どのような国が栄えるのか？

越喜来中学校一年 窪田 創

昔、万という国がありました。その国には西にけわしい山がたくさんあり、東に広い海があり、北には鉾山があり銅やすず、鉄がとれました。南には何個か城

がありました。広い国でした。

その国は悪い王様がいて、その王様は民をいたわらず、税をきびしくしていて、兵士になりたくない人までも兵士にして、弱い兵士は、死罪または重いばつを与えていました。税金は米のとれた分の三割も納めろということでした。

その王様に怒りを持った民たちがある日反乱を起こしました。民のことをいたわらなかった王様は臣下にも見放されて、処刑されました。だれも、悲しみませんでした。処刑された王を見ていた民の目は、こう言っているようでした。

「こんな王は処刑されて当たり前だ。」

やがて、次の王が選ばれました。次の王には万良君という王子が王になりました。その王子は全てのこと優秀でした。

王となった万良君はこのような法をつくりました。一つ目は税は米のとれた分の五分を納める。二つ目は兵士になりたくない者はならなくてもいい。三つ目は公平に罪の有無や重さを決める。という先王の何千倍も良い法を作りました。

その後国はまとまり、民と仲良くしながらやってきました。民は不平も不満も言わずに税を納め、公平に罪を決めるので、しだいに大きな事件が起こりません

でした。

ある日、隣の国が攻めてきました。しかし、交渉にも優れた万良君が臣下と一緒に和平を求めて成功し、隣の国と同盟を結びました。

その後、ほかの国とも仲良し、わらや鉄などのあり余るほどの資材を使つてぼう易によって国がうるおいました。

その時、万の国のずっと遠いところに、先王のような王様のいる国ができ、世界の大半の国々を攻めたり、ウィルスをまきちらしたりして人や物を奪いながら国土を広げました。こちらは、平和に同盟や和平を結び、何も失うことなく、ほかの国々とまとまっていきました。

次の年に戦いが始まりました。相手の国は面積は万の国にもおとりませんでした。が、あまりに暴力的に国土を広げてしまったため、人が不足していてもはや戦いにすらなりませんでした。

長く考えた相手の国の王様は投降しました。そして、あつけなくこの戦いは終わりました。

百年後、万良君に教えられたことを言い伝えてきた家族がいました。教えられたことはこういうことでした。

「この戦いのように血をできるだけ流さないようにす

る国は栄える。民の心を民心をつかめる王がいる国は栄える。」

万の国は今も栄えています。

夏の思い出

越喜来中学校一年 畑中 春薫

待ちに待った夏休み。僕は海に行ったり友達と花火を見に行ったりと、自分で計画を立てていた。しかし、僕の家では母さんにそのことを言わなければならない。

うんざりしながらお母さんにそのことを言うのと、

「あら、お母さんもっといい所に行かせるつもりだったんだけど。」

と言ってきたから、自分の計画よりもそっちの方が気になって、

「え!! それどこ?」

と興味を表してしまった。

「それは内緒。あ、言うの忘れてたけど、そこに明日龍介一人で行ってね。だから早く準備しておいて。」

「うん。…え! 明日!! しかも僕一人?」

「そうよ。そう言ったじゃない。」

ちなみに龍介は僕の名前。ぼくはどこに行くのか、何

日過ごすのかすらも分からずに準備していた。

そして翌日。お母さんの車で、目的地へ向かった。しかしそこへなかなか着かない。もう出発時刻から五時間は過ぎていた。

そしてようやく着いた所は、見渡すかぎり山・山・山。前方を見ても、後方・左・右を見ても山しかない。そして風はかすかに海のおいがする。いやな予感しかしない僕はおそろおそろ

「ねえ、ここどこ?」

と聞くと、

「どこって越喜来よ。岩手県の。お母さんのいとお家があるの。はい、これ。ここに書いてあるから。じゃあね。」

と言って紙を持たせて行ってしまった。

「はあ。遠いな。」

と確信し、僕は歩きだした。

そしてようやくついて、中に入り、

「こっこんにちは。」

と言って数秒するとおばさんが出てきて、

「あんだ、どこのわらすだべ。」

と、突然聞かれた。

「へっ? わらす? なんですかそれ。」

「あんだ都会っ子だな。わらすっ子のは、子どもど

いうこどだ。」

と言われ、まずお母さんの名前を言った。

「えっと、ぼくは東京から来た、佐藤和子の息子です。

龍介っていいいます。」

「ああ！和子の！おらあんだの母さんのお姉さんだがら。さ、上らっせん。」

どうやら僕の言ったことは正しかったらしいと確信した。

中には僕と同じ年の洋太と3つ下の彩葉と言う子がいた。

「よう！あんたが龍介か。外に遊びに行こうぜ！」

「えー。中で遊ぼうよ。折り紙とかたくさんあるし。」

「え？なんでみんな海に行かないの？」

と言ったとたん二人は元気がなくなった。そして洋太が、

「四年前大震災あっただろ。その時に砂浜流されたし、地盤沈下で面積小さくなったし、それに、前大好きだった海が怖くなって…あれ以来行ってない。」

「そうだったんだ。」

なんか聞かない方が良かったなと後悔した。しかしすぐに洋太が、

「それよりさ、虫取りに行こうよ。」

と誘ってくれたが虫がきらいな僕は断りたかった。し

かし、洋太の目がきらきら輝いていたのでうんとしか言えなかった。

近くの林で洋太がせみをつかまえてぼくにみせた。

「うわー！怖い！キモイ！」

「何言ってるんだよ。せみって十数年地中にいて、やつとでてきたのに二、三週間で死んじゃうんだぜ。なんか一生懸命生きてるってことが、感じられるよな。」

そんなこと全く知らなかった。もしかしたらせみは人間よりも命を大切に生きているかもしれないと思った。

「あつ、カブトムシ。カゴ持ってた、捕まえるから。よつ、やった捕まえた。」

「すごいね。僕、無理だよそんなこと。」

「できるさ、あつ、あの虫捕まえてみな。」

「えー。うーん怖いよ。えっえいっ。」

「やった！とれてるじゃん！さわってみな。」

「えー、やだ、やだ。絶対ムリ！」

僕は虫を触ったことなんて一度もなかった。しかし次第に興味がわいて、虫の背中の部分を触ってみた。

「うわあ、すごいっるっるしてる。もしかしたら、虫好きになれるかもしれない。」

初めて虫の素晴らしさを実感できた。

「洋太のおかげだよ。ありがとう。」

「えへへ。」

二人向かい合って笑った。そして虫について話しながら家に戻った。二人とも汗びっしょりだったので、彩葉ちゃんが冷たい麦茶を持ってきてくれた。

「キンキンに冷えててウマイね！」

「うん。めっちゃウマイ。」

いとこの家は、木に囲まれているから、余計涼しく感じた。

「なあ、次、何する？」

「次は彩葉ちゃんも一緒にできるものがないね。」

「折り紙！決定！」

「ええっ！じゃあやろうか。」

と三人で折り紙を始めた。彩葉ちゃんは、いろんな種類のお花を折っていた。

「すごいね。僕なんかそんなに折れないよ。だれかにあげるの？」

「うん。龍介君もだれかにあげたら？」

「ええっ。だって僕下手だし。」

「下手でも気持ちいが伝われば、みんな喜んでくれるよ。だって自分のために折ってくれた物だもん。」

「じゃあ、俺は母さんにあげよつと。」

そういえば僕は、お母さんにこういうこと一度もしていない。恥ずかしいと思っていたから。

「なんでみんな恥ずかしくないの？」

「だって、何で感謝の気持ちを伝えるのが恥ずかしいのよ。」

「というか、恥ずかしくても気持ちを伝えた方が、お互い気持ちが分かっているんじゃないの？いいか、自分の気持ちは、絶対に一人だけでもいいから伝えろ。じゃないと、本当の仲間がいなくなっちゃうんだぞ。」

僕は洋太と彩葉ちゃんの言葉で、ようやく気が付いた。だから、お母さんとすれ違ってばかりなのだ…。

それから、洋太と彩葉ちゃんに色々なことを教えてもらいながら過ごした。

その日から一週間が経った。電話がかかってきて、おばさんから伝言をもらった。

「明日さ、和子がむかえさ来っから、準備しとけだど。」

「えっ。あつ、はい…。」

「ええっ、もう帰っちゃうの？」

「もっと一緒に遊びたいよ…。」

「ねえねえ。僕、もう一回折り紙でお花作りたい。彩葉ちゃん、教えて。僕、その折り紙をお母さんにおくりたいんだ。」

「分かった。ちよつと難しいけどガーベラ作ってみよう。」

僕は教えられた通りに作った。

「ありがとう。あ、そうだ、このガーベラ三個分の折り紙ちようだい。」

「？いいわよ。はいどうぞ。」

僕は、洋太と彩葉ちゃん、そして、おばさんに気持ちを伝えたかった。そして、みんなが見ていない時を見はからって、三個ガーベラを作った。特に洋太と彩葉ちゃんには、教えもらったことの感謝を伝えたかった。

そして翌朝、帰る準備をすませ、みんなを居間に呼んだ。

「いきなり呼んでごめんなさい。はい、おばさん、今までありがとうございました。」

「まあ、なんというごだべ。ありがとう。」

「彩葉ちゃん、はい、折り紙教えてくれてありがとう。」

「わあ、すごい！ありがとう！」

「そして洋太。はい、たくさん大切なこと教えてくれてありがとう。」

「おう！また来年来いよ！」

「うん。きつと来るよ。おばさん、彩葉ちゃん、洋太、本当にお世話になりました。また会う機会があったら、よろしくお願いします。」

「お母さんも、きつと成功するよ！がんばって渡してね。」

ちようどその時、お母さんが来た。

「龍介、行くわよ。早く乗って。お姉ちゃんありがとう。多分来年もこっちに来させるわ。よろしくね。」

「はいはい。いつでもどうぞ。待ってっから。」

「うん。ありがとう。じゃあね。」

そう言って、走り出した。

「お母さん、はい、これ。いつもありがとう。これからはちゃんと毎日の出来事話すからね。」

「あら！めずらしい。ありがとう。きれいに作ったじゃない。お母さんすつごくうれしい。そうだね。会話増やそうね。」

ちゃんと話せるようになった僕は、成長したなど感じた。そして来年が楽しみだ。

ふしぎな冒険

越喜来中学校一年 平田 涼介

これはぼくと犬のシロのふしぎな冒険のお話。

ぼくとシロはいつも一緒にいた。遊ぶ時も、ごはんの時も寝る時も、いつも一緒にいた。

ある日、ぼくはいつものように朝8時に目を覚ました。いつもなら、シロを起こして朝ごはんを食べるは

ずでした。しかし、ぼくが起きた頃には、もうシロはいませんでした。ぼくは家の中を探しました。こういうことはたまにありました。朝起きて、シロがいない家の中を探し、ぼくのお気に入りすの下にいました。でも今日はちがいます。いつも通り最後はいすの下を見ました。いません。シロがいません。ぼくはとっさに家の外に行きました。いつもの公園にいるのかと思い、公園へ行きました。しかし、いませんでした。

しかし、奥の方をよく見ると、シロのシッポらしきものが見えました。ぼくはそれを必死においかけた。そしてぼくは確信した。あれはシロだ！と。しかし、シロはぼくに気付かず、森の中に入って行きました。ぼくもその森の中へ入って行きました。しかし、あまりにも木が多かったので、シロを見失いました。

シロを見失い何時間たったことでしょう。目の前にいたのはシロでした。いや、違います。それは、シロより少し大きい犬でした。その犬は、ぼくについて来いという目をしていました。ぼくは、その犬についていきました。すると、森を抜けてしまいました。抜けた先に見えたのは、辺り一面の草原でした。ぼくは、こんなところがあったか？と思いました。さらに奥へ進んでいくと、そこには、たくさんの犬がいました。見る限りでは、ここは、犬の国です。その中にはシロ

もいたようです。

シロは、ぼくに気付いたのか、ぼくのほうへ喜んで走って来ました。ぼくはあまりの嬉しさに涙が出てきてしまいました。シロに会えたことは嬉しいが、あまりにも広い草原だったために自分がどっからきたのか、わからなくなってしまうました。しかし、平和そうなどころだったので、少しの間この草原に犬と暮らすことにしました。朝がきました。いつもは、ぼくの方が早く起きてシロを起こしごはんを作ってあげるのが毎日であったが、今日はちがいました。今日は、朝早くにシロが起きて、ぼくのことを起こしてくれました。朝食は、シロが朝早くに起きてとってきてくれた鳥を焼いて食べました。

朝食をとってすぐに、ぼくは森に入り、家へのルートを探しました。しかし、どの場所に行ってもたどり着くのはこの草原。ぼくはおかしいなと思いながらも一日を終えました。

二日目の朝、今日もシロがぼくのことを起こしてくれました。その時、シロの顔は、真っ青になっていました。シロが、急に外に出たので、ぼくも急いで朝食をとり、外に出ました。すると、外では戦争をしていました。

話を聞くとところによると、ほかの草原の犬たちがこ

この草原をのつとろうとしてきたところ、防衛軍が止めたことで起きてしまったらしい。

シロは立ち向かっていきました。しかし、相手の兵の方が多かったために、シロも歯がたちませんでした。しかし、ぼくは犬より知能があるので、火を使ったりして立ち向かっていきました。結果は、こちらがわが勝ちました。我々は自分達の草原が守れただけで良かったのですが、相手の犬は、全滅してしまったので、ついでに、向こうの草原をもらうということになりました。一度草原を見に行こうということになったので、みんなで草原へ行きました。するとそこには、立ち入り禁止と書かれた看板が立っている洞くつがありました。他の犬は、そこをさけて通っていましたが、ぼくとシロはこっそりとその洞くつへ入って行きました。中は、そうとう暗い場所でした。そこで松明を持って中を進むことにしました。一直線の長い洞くつでした。あまりに長すぎて向こう側が見えませんでした。ぼくとシロは気味がわるくなったので、一度外に出ました。その時、ちょうど他の犬達が、元の草原に戻ろうとしていました。ぼくとシロも、もう、夜になりそうだからということ、一緒に戻ることになりました。戻ってからぼくは、明日の朝早くにあの洞くつへ行こうということを考えていました。

次の日、まだ日が昇っていない時間帯にぼくはシロを連れて一緒に洞くつへ行きました。洞くつの中に入ってみると、やはり気味が悪い空気がただよっていました。しかし、ぼくとシロは勇気をふりしぼり進んでいきました。ぐんぐん進んで行きました。いくら進んでも何にも出てきません。そうこうしている間に出口が見えて来ました。この先には何があるのだろうかとかわくしながら走っていきました。するといきなり、岩かげから大きな魔物が現れました。ぼくとシロは、驚き、来た道をもどっていきました。幸いにも、魔物はこちらに気付いていませんでした。外に出てからぼくは考えました。魔物をたおして進むか、魔物をさけて進むか、考えました。結果、一度戦いにいき、むりそうであつたらさける。と、いうことにしました。

その夜、ぼくは剣をつくりました。そして次の日の朝早くに昨日作った剣を持ち、洞くつへ出かけました。奥へと進んで行くと、いました。あの魔物が。ぼくは、魔物に思いっきり剣をふり下ろしました。それが足に当たりました。すると魔物は、不意に足をやられたので、後方へ転倒しました。なので、ぼくは、今がチャンスだと思い、魔物に立つひまを与えずに攻げきし続けました。すると、昨日作った剣がこわれてしまいました。

ぼくは、剣がこわれてしまい、パニックになりましたが、魔物が立つ前に、外にひなんしました。ぼくは、また、剣を作り次の日にそなえていました。

そしてまた朝が来て、出発しました。このときシロはおいて行きました。なぜかというところ、このごろ早く起きているシロは、なかなか寝れずにいました。そのため、昨日から、体調をくずしてしまいました。そのため、おいて行きました。ぼくは一人で洞くつの中へ入っていききました。さすがに一人で洞くつの中へ入って行く、かなり心細い感じがしました。

それでもぼくは歩きました。あの魔物がいるところまで堂々たる姿勢で進んで行きました。そして、着きました。しかし、そこに魔物はいませんでした。ぼくは、あれ？と思いました。その時です。いきなり魔物がぼくをつかんで頭にある自爆ボタンを押したではありませんか。ぼくは必死に逃げようと思いますが、出られません。カウントダウンが始まりました。その時ぼくは、ものすごくあせっていました。残り三秒となった時、魔物が何かに攻撃されて倒れました。その時ぼくは、遠くに投げ出されました。何がおきたか知るために立ち上がると、そこにはシロがいました。そしてぼくは、シロを連れ出口へ走って行きました。その時魔物が爆発しました。

ぼくとシロは吹き飛ばされて外へ出ました。そこは、ぼくの家の前でした。ぼくは帰れたのでうれしかったです。その後、ぼくとシロは楽しく日常を送りました。

サンリク中学校の怪談

越喜来中学校二年 三浦 まとい

あなたの中学校にも、昔から伝わっている怪談がありますか。

実は、およそ七十年前に建てられたとするサンリク中学校には、三つの怪談がありました。

一つ目は、どこも窓が開いていないのに、ドアが急に、「ガタガタガタ」と鳴り出すことです。

二つ目は、世界史の授業のときに、謎の女の声がすることです。これは、二、三人の人が聞いたそうです。

三つ目は、図書室で、急に本棚から本が落ちてひとりでにページがめくられているということです。

これらの怪談は、サンリク中学校でたいへんうわさになっていました。

その時、三年生の女子三人が立ち上がり、探偵団を結成しました。そして、謎を解き明かそうとしました。

第一の謎は、ガタガタガタです。探偵団はまずこの

謎から解いていくことにしました。三人は、「ガタガタガタ」という音のするドアの前に行きました。

「このドアが……」

「そうだね。なんかちよつとこわくなつてきちゃった。」

「どっかに穴があるんじゃない？そして、そこから、風でも入ってきているんじゃない？」

三人は、ドアの近くに穴がないか探しました。でも、どこにも穴はありませんでした。しばらくの間、静かにドアを観察していました。その時です。

「ガタガタガタッ」

いきなり、音がしました。三人のうちの二人は、鳥肌がたつて、ふるえていました。一人が、発見しました。

「奥の方のドアにすき間があるよ。」

「あつ、本当だ。でも、今日、風あまりふいてないよね。」

「確かに。でも、急に風が強くふいたんじゃない？」

三人は顔を見合わせてうなずきました。これで第一の謎は解明されましたが、一人だけ疑っている人がいました。

「本当に解明されたのかなあ。」

「大丈夫だよ。気にしないで、次の謎を解きに行こうよ。」

一人は、少し疑ったまま、次の謎の所へ行きました。

第二の謎は、世界史の授業のときに聞こえる女性の

声です。この声は、一年教室で聞こえたそうです。とりあえず、三人は、一年教室に行ってみることにしました。向かっている途中は、みんなドキドキしていました。到着したら、教室はものすごく静かでした。現在は午後八時でしたが、普段は聞こえる虫の音ですら聞こえませんでした。三人は、ますますこわがって鳥肌がたちました。風のない夜でした。突然、急にドアが、「ガタガタッ、ガタガタッ、ガタガタッ」前の音よりもすぐ大きな音でした。三人は、教室から飛び出して出ていきました。

「今の音、なんだったんだろうね。」

「なんか、怒ってびっくりさせようとした感じの音だったよね。」

一人は、ふるえていて声も出ませんでした。

「もう一度、教室に行ってみようよ。」

一人はおそるおそるうなずきましたが、もう一人は、ものすごくふるえていました。

「みんなで、手をつないで行こうよ。」

一人は、迷わずうなずき、もう一人はふるえながらうなずきました。そして、何もいないかおそるおそる確認しました。何度も何度も教室を見わたしていると、次の瞬間、

「ねえ、助けて。助けてちょうだい。お願い、本当にお願い。」

女性というか、中学生くらいの子どもの声でした。三人は声をそろえて、

「キャアー」

と悲鳴をあげました。職員室で残業している先生達には、一番遠い教室なので悲鳴は聞こえませんでした。三人は、気を失ってしまい、10分くらい目を覚ましました。一人が目を目を覚まし、他の二人を起こしました。

「さっきの声、何だったんだろう。」

みんなで、もう一度辺りを見て確認しました。それでも周りには何もいませんでした。第二の謎は解明されないまま終わってしまいました。

「次が最後の謎だ。早めに解明して、今日は帰ろう。」

最後の謎は、本が勝手にめくられるということでした。

図書室に向かっていると、一人が

「あのさ、帰ってもいいかな。すごいこわくて、もうこりこりなんだよね。」

とてもふるえながら言いました。

「そんな…」

「ごめん。本当に、気持ち悪くなってきたから。」

「分かった。」

「二人でがんばろう。」

探偵団は一人減ってしまい、二人になりました。そして、二人で図書室に着きました。入ってみると、そこには何冊か本が落ちていて開いていました。

「あのさ、本をわざと開いておいて、本当に勝手にページがめくられるか確かめてみようよ。」

二人は、一度、図書室から出て行きました。15分くらいたって行ってみると、本はめくられていました。「どうして、めくられるの？」

そう疑問に思い、今日は帰って休むことにして、次の日確かめることにしました。

そして、次の日の朝、図書室に行ってみると、昨日確かに本棚にもどした本が落ちていました。

また、今日の夜も図書室に行きました。すると、すみにあるコピー機が勝手にコピーを始めたのです。二人は顔を見合わせてふるえました。

「また一つ、謎が増えた。」

「なんか、もう、こわくなってきたから、帰るね。」

そう言って、走って帰っていききました。とうとう、探偵団は一人になってしまいました。そして、次の瞬間、図書室のドアがガタガタガタ、本が落ちてページがめくられ、

「助けて、お願い。」

と、同時に謎の現象が起こったのです。コピー機からも、紙が出てきました。その紙は、探偵団あての手紙でした。その手紙の中身は

「チカシツノアカズノマ」

図書室を出て、まず、地下室に行ってみることにしました。地下室まで、ゆっくりと歩いていきました。そして、あかすの間を探しました。

懐中電灯とコピー機から出てきた紙を手に、あかすの間の扉の前に立ちました。一度深呼吸をしました。扉を開けてみると、一人の男性が立っていました。びっくりして、しりもちをついてしまいました。でも、よく見ると、校長先生でした。

「実は、謎の現象を確かめようとしていたら、ここにあかすの間にたどり着いてね。」

と、校長先生が言ったら、少し安心しました。

「実は、私もなんです。」

「そうなんですか。では、一緒に奥の部屋へ行ってみましょうか。」

「はい。」

二人は、一緒にゆっくりゆっくり奥の部屋へと進んでいきました。

すると、壁に見たこともない字が刻まれていました。「読めそうにないね。」

二人は、古代学者に写真を撮って送ることにしました。

次の日から、普通の平穏な日々がもどりました。探偵団の三人も普段通りの明るい生活をおくつていきました。

数ヶ月後、古代学者から結果が送られてきました。古すぎて、解明できないという結果でした。校長先生と探偵団の三人は少しがっかりしました。

結局、謎は解明されないまま終わってしまいました。まだまだ、誰にも知られていない恐怖がどこにかくされているのかもしれませんが。

ぼくの夢

越喜来中学校二年 菊地 南美

ある日、ぼくは夢を見た。どんな夢か、気になりますか？では、教えてあげましょう。

ようこそ。ぼくの夢の世界へ。ぼくが夢を見たのは、昨日。未来の越喜来の夢。現実は今も復興が進んでいる。未来の越喜来はというと、今とは大違い。町が元通り。町の人は、活発に働いていて、今よりも明るく元気。夢を見ながら笑ってたかもしれない。

学校も新しくてキレイで子供達も楽しそうだった。ぼくも遊んだんだ。子供に混じって。一応中学のぼくは、背が小さいから、以外となじめてる。小学生に戻った気分で、おもいっきりはしゃいだ。

「なんて楽しいんだ。」

すなおに思った。今までで一番すなおになれた気がする。

ぼくは、夢からさめるまでたんけんしてみることにした。

まず、未来の中学校。今の学校とのちがいが気になって行ってみた。校舎が新しい。制服は、ほとんど変わらない。丁度、部活の時間だったから秘密でおじゃましてみた。ぼくは卓球部。げんえき中学生だから普通になじめたし、ラケットさばきも負けない。知ってる子、知ってる先生は、ほとんどいない。部活終わりと同時に目がさめた。とっても楽しくて、またたんけんがしたかった。

学校でみんなに話してみた。みんなは、

「いいな。見てみたいな。未来がどんなふうなのか。」

とか、

「今とちがう？全然ちがう？どんな感じ？本当に夢の通りの未来になったりして。」

とか、好き勝手言ってる。でも実はぼくも実現しない

かなって思ってる。

また昨日も夢を見た。夢の続き。また見たいと思いながらねたからかもしれない。今回は、お散歩。もくてきもなくなった歩くことにした。お店も、お家もたくさんある。町の人とあいさつを交わしながら、結局ぶらぶら歩いていると海に着いた。海は……。すんごくキレイ。驚いた。防波堤が出来てる。遊んでいる人とか、釣りをしている人もいる。ぼくは、何をするものもなく、階段にすわってボーっと海をながめていた。すると、小さなかわいい女の子が

「何してるの？一人なの？私、ママと来たの。」

ふーんと思いつながら女の子の話を聞いていた。ボーっと聞いていると

「遊ぼっ。」

といきなり言われた。何だ、いきなりとか思いながらも、しぶしぶオーケーした。本当は、「海の風にふかれながら、海を見てたほうが気が楽だから良いかな」って思っていた。

でも、遊んでみたら以外と楽しかった。女の子と一緒に遊んではしゃいだ。この夢を見たら、たくさんはしゃいでいる。子供みたい。実際子供だけど。

現実でも、こんなふうにしぜんにはしゃいだりしたい。そしたら、今よりも、もっともっと楽しくなる。

またまた夢。今回は、大王杉と新山神社。大王杉は、今と変わらない。さらに歳をとっただけ。夢の中では、何歳になっていたのか。

新山神社は、相変わらず、ながめが良くて涼しい。大きな海、たくさんさんの家、大王杉。何でも見える。ずーっとここにいたい。

おっ。まだ夢から覚めない。それでは、夏虫の公園とお湯っこに行こう。公園の遊具はほとんど変わらない。今よりもっと小さい頃、お父さんと何度も来た。タワーに登るのが怖くて、でも始めて登り切ったときは、すごーくうれしかったな。ひさしぶりに、登ってみることにした。やっぱり怖い。登り切れなかった。ひと汗かいた後はやっぱりお湯っこでしょ。いやー、やっぱり気持ち良い。身も心もおだやかになる。今と変わらず、ホッとなる。やっぱりお湯っこは最高ですね。

パラグライダーも絶景。新山神社から見たよりもいい。ふだん出来ないことも夢だから出来る。これは、今まで見た夢の中で、一番楽しくて、学べて、けいけん出来た良い夢だと思う。

夢から覚めて、夢を全部思い出してみた。

落ちついて考えてみたら、僕は何年後の未来の夢を見ていたのが分からない。でも、学んだことがある。

まず一つ。自分を、もっともっと出して良いんだってこと。夢の中みたいにな、すなおになったりはしゃいだりして良いんだって分かった。そして二つ目。何年後に町が元に戻るかはまだ分からないけど、僕達が出来たことは、たくさんある。「僕達みたいな子供の力で、何にもならない。役に立たない」なんて思わないで、どんなに小さな小さな、ささいなことでも良い。自分が良いと思ったことは、思うだけではなくて行動に移す。

この夢のおかげで、僕達がこれからやっていくべきことが分かった。僕だけではなくてこの地域に広げ、よりよい未来の越喜来をつくっていかうと思う。

《高校生部門》

空へ跳ぶ

大船渡高校一年 柏崎 美結

届きそう、手で触れられそうなくらいに雲が近い。まるで空に浮かんでいるような錯覚に陥るくらい目の前に空は広がっている。私は、燦然と輝くそれに手を伸ばす――

「つゝぐゝみゝゝ！またアンタはマットの上で寝転がってー。ちゃんと練習しなさい。」そんな間延びした声と共に、みちるのデコピンが私のおでこを直撃した。思わず小さく唸るように声を上げた。
いゝ痛い・・・。

患部を抑えつつマットから起き上がり、涙目でみちるを見上げると、彼女は「先輩たちが合宿で居ないからってサボらないー。ほれほれ。」と私の背中をぐいぐいと押してきた。私は、仕方なくのそのそとアップを再開した。みちるは、ため息をつきながら長距離組の練習に合流するため、グラウンドの端へ走って行った。優木みちるは、私の少ない友達の人であって、特に仲が良い。彼女とは保育園からの付き合いだから、もう出会って十三年も経つ。家も近所だったからよく遊んだりしてたっけ。そんな昔のことを思い出しつつも、入念に柔軟体操をし、バー受けにバーを乗せた。腕を回しながらマークへ向かう。

ザッザッ

靴の裏に土を馴染ませて、軽く上にジャンプする。重心を後ろにして、グッと足を踏み込む。

タッタタタタタッ

ステップを踏んで、膝をぐんと曲げて弧を描くように上に上に跳ぶイメージで。

短い時間だけど、空の近くに行けるこの時間が好きで、もつともつと高く跳びたい。
ボフッ

ずんつと体がマットに埋もれた。太陽の光を浴びたマットは熱を帯びていて、少し熱かった。

部活はいつも通り十二時に終了し、私はみちるが着替え終わるのを部室の外で待っていた。ガチャッとドアの開く音がして、みちるが出てきたのだが、出てくるなり気持ち悪いくらいに目を輝かせて、私のことを見えた。何かと聞くと、最近できたばかりのクラブ屋に行きたいとの話だった。

こいつ：私におごらせる気だな・・・。

そう心の中で思いつつも、事実みんなの噂を聞いて私も気になっていたお店だったので、みちると行くことにした。

そのお店は、いつも私が電車に乗る駅へ向かう通り道にある。こじんまりとした可愛らしい外観で、木でできたイスが二脚とテーブルが一つだけおいてあった。ドアを開けるとちりんちりんと可愛いベルが鳴って、耳をくすぐる。メニューは豊富でどれにしようか迷ってしまう位だ。私は、無難にストロベリーを頼むことにした。みちるは、まだ隣で悩んでいる様子だった。結局、みちるもストロベリーにして、二人で向かい

の椅子に座って食べることにした。イチゴジャムが甘酸っぱくて生クリームとよく合っていた。みちるがもくもくと食べ進めている様子を横目に、ふとテーブルの上に視線を移すと、小さなノートのようなものが何冊か重なっていた。クレープを片手に、その中を開いてみると、ぎつしりと色んな人のメッセージやイラスト、クレープの感想などが書いてあった。

「何それ何それー。」

最後の一口を放り込み、口の周りを指で拭いながら、こちらに身を乗り出してくるみちる。みちるにもそれを見せてあげると、「へえーいいなー。うちらも何か書こうよ！」とノートの隣に置いてあったペンをケースから取り出した。

「そう言っても、どのノートもぎつしりで書けるようなところなくない？」

ノートは四冊くらいあったけど、どれも一ページ目から最後のページまでぎつしり書いてあって、どこにも書ける余裕がない。「えーマジかよー。」とみちるが、口を尖らせてペンケースをしまおうとしていたら、「あの。」頭の上から、声変わりが終わっていないような低いんだけど高いような声があった。頭上を見ると、エプロンをした店員さんらしき男の人が小さなノートを持ってこちらに差し出していた。

「良かったら、何か書き残していつてください。」

そう言って彼は、テーブルにノートを置くと、カウンターの奥へ消えて行った。

きつと私たちの話を聞いてて、持ってきてくれたんだ…。

ノートは、ドット付きの小さなメモ帳みたいなものだった。何を書こうかと考えていると、みちるがそのノートを私から取り返して、なにかをカリカリ書き始めていた。昔から汚いみちるの字を見つめながら、ストロベリークレープを完食した。

みちるが書き終わったのか、私の方にノートをくると回して、ペンを添えてきたので、私はみちるが置いたオレンジ色のペンをとった。『ストロベリークレープおいしかったです！また部活帰りに来れたらいいな。』

：なんて平凡なんだ。いや別に非凡である必要はないのだけど…。ま、いいか。

私は、クレープがつつまれていた紙をごみ箱に捨てると、スポーツバックを肩にかけ、行くよとみちるの肩を叩いた。

「ありがとうございましたー。」

店員のお姉さんの声がベルの音とかぶって遠退いた。次の週、私はまたみちるとあのクレープ屋さんに行

った。ノートを見ると、私の書いたものに対して、ちよつと崩れたような字でコメントが書いてあった。

『何の部活をしているんですか？』

正直ちよつと怪しいな、なんて思ったりした。けど、みちるに囁し立てられ、結局返事を書くことにした。

『陸上部です。走り高跳びをしています。』

次の週にも返事が来ていて、『自分も陸上をやっていました。短距離だったんですけどね…。』と書かれていた。

やっていたという言葉に少しだけ引かかったけれど、もしかして学生ではないのかもしれないというくらいに思っていた。

そして、また次の週にもそのまた次の週にも…とやりとりは続いていった。初めはどうかなんて思っていたけど、話し始めてから毎週その人からの返事を楽しみにしている自分が居た。毎週のように続くそのやりとりを見ていたみちるには、「アンタ連絡先聞いたらいいんじゃない？」と言われた。

でも、そんなことしたらそういう目的だと思われやしないだろうか…。確かに、この人ともっと話してみたい気がするんだけど…。

やりとりが続いて、二ヶ月が過ぎたある土曜日。私

は、部活帰りにまたあのクレープ屋さんに寄ることにした。今日は、みちるが体調不良で部活を休んだから、一人で入ろうと思っていた。お店のガラス張りになっているところをふと覗くと、いつぞやの男性店員がテーブルに置いてあるノートを持って微笑んでいる姿が見えた。彼は、テーブルに置いてあるペンを手に取ると、スラスラと何かを書いて、ノートを閉じて元の場所に重ねておいていた。私は、サツとお店の中に入つて、注文を済ませ、テーブルの上のノートを見た。『今月末に大会があります。自己ベストの更新に向けて頑張ります！』

『頑張ってくださいね、応援します。』

さっき店員の人が持っていたペンの色と同じ緑色の文字で、書かれていた。

これは偶然なの？それとも―

次の週にもやっぱコメントはあった。

『分かります。自分も空は好きです。全て包み込んでくれるようなそんな感じがして。』

この日の文章はどことなく寂しい気がした。

私の勝手な推測だけれど、もしかしてこの人は、足とか痛めて、陸上を止めざる負えなかったんじゃないか、と思った。そう思うと、私の心の中の何かが動いた気がした。

大会当日、私は淡い期待を持って、あの店の前を通ることにした。彼がもし、あのノートの人だったなら…。

クレープ屋さんの通りを歩いていると、店の前を掃除しているあの店員さんを見つけた。

「あの！」

思い切って、出した声はちよつと裏返ってしまった。

店員さんは、目を見開いて私を見つめていた。

「こ…これ、いつものノートに挟んでおいてもらえませんか。」

そう言って店員さんに渡したのは、昨日書いた手紙だった。店員さんは、ちよつとドギマギしたような表情でその紙切れを受け取り、「分かりました。」と頷いた。私は、なんだか恥ずかしくなつて、集合場所である駅の東口に走って行った。

『こんにちは。突然このような手紙を書いてごめんなさい。それから、いつも私に返事を書いていただきありがとうございます。あなたには話しましたが、今日は大会です。この間書いたように自己ベストが出せるように頑張ります。また、私の勝手な憶測なのですが、あなたは、何か辛い理由があつて、陸上をやめてしまったのかと思います。私は、この広い空を飛び越え、輝く太陽をこの手につかみたいと思っています。あな

たにも、早く自分の太陽が見つかることを祈っています。』

《一般部門》

椿 の 中 で

村上 真紀子

「じゃあ、行ってみる？」

そう言われて、私と両親は母の実家へやってきた。母の実家は幼い頃に來ただけでしばらく來ていなかった。

母の実家には祖父母が居た。

「千春、久しぶりね。」

祖母は微笑み話しかけてきたが私は黙つてうなづいた。

私、遠野千春（14）は、東京で少し嫌なことがあり、学校を休むことにした。元々体が丈夫でないこともあり、学校側は納得してくれた。

というか、学校側としては転校させたがつっていたのを母が無理矢理休日にさせたとも言えるが…。

母の実家はわかめや秋刀魚で有名な大船渡である。

「千春、荷物はこの部屋ね。」

「はい。」

千春が悩んでいるのに気付いたのは、最近だった。仕事ばかりでなかなか気付いてあげられなかった。

「お母さん、私……」

一人娘が泣いていた。心が傷付いていたのだ。そんな娘をほっとけなかった。だから学校へ抗議（文句）をしにいった。学校側は娘を転校させる的なことを言うてきたが納得などできるはずもなく休みを取らせた。娘は戸惑いながらも私についてきてくれた。

「お母さん、海って広いね。」

「そうよ、広いのよ。」

海は東京では見たことがなかった。

「これ、わかめ？」

「うん。」

初めて見るわかめはキレイだった。海水では茶色っぽいのお湯にくぐすと緑色になるのは見てておもしろかった。

翌日、玄関の前に男の子と女の子が来た。

「この人が東京から来た子？」

私のことだとすぐにわかった。

「こんにちは、坂本美緒です。」

美緒ちゃんは私と同じ年らしくニコニコしていた。

もう一人の男の子は怒っているように見えて怖かった。

「こっちは、柏木実。」

「よろしくお願いします。」

「……うるせえ。」

バシンツ

手をたたかれて走り去られてしまった。

「実！ごめんね、千春ちゃん。」

「いえ……」

不思議と彼の目に怖さは感じなかった。

「実、あんたねー。」

「都会の者なんがやんだ。」

「……ハァー。」

実は自分の町を汚される気がしたのだ。

だから千春の手をたたいた……と主張したが翌日謝りに行かされた。

「あやまんね。」

「千春ちゃん何も悪いことしてねえべ。」

「……」

「大丈夫だよ、ケガしてないし、ビックリしただけ。」

だから……」

「実……」

「……ごめん。」

「実君……」

千春は少し驚いたが、笑ってうなずいた。
実は、一旦止まり逃げるように

「…じゃあな。」

と言って走り去っていった。

「千春、大船渡好き？」

「うん、好き。」

「あのね、千春、どうしたい？」

「え？」

「ここに残る？それとも戻る？」

それは転校するかまたあの学校へ行くかという選択だった。そういえば、一週間もたっていたことに気付いた。

「少し考えさせて。」

千春には夢があった。

「私、保育士になりたいの。」

子供好きの千春はそう思っていた。

「へー。」

「美緒ちゃんは？」

美緒は少し考えてこう言った。

「地元から離れたい。」

「えっ…。」

少しショックを受けた千春に美緒は笑って言った。
「田舎には田舎の良さがあるよ。それでも外の世界も

見たいの。千春ちゃんは都会にいたからわからないだろうけど、やっぱり少し不便なんだよ。」

「そっか。」

「…何かごめん。」

「あ、別に…。」

千春は久々にメールを見た。すると…

「一通もなし。」

千春に友達がいらないわけではないのだが、あるきっかけで友達がいなくなってしまった。

「千春、告られたんだって？」

「えー。」

千春はモテモテという訳ではないが、たまたま告白されたのを友達が見たらしい。

「…断ったよ。」

「えー何で？」

「ちよっと…考えられなくて…。」

自分のことで精いっぱいな千春は断った。

それだけだったのに翌日から千春は周りから無視されてしまった。

最初は気のせいだと思っていたが次第に気付いてきて孤立してしまった。

そのことを両親に相談できずに一人悩んでいた。だが、母が気付いて実家の話をして行くと行ったのだ。

「…お母さん、私…。」

「おじやまします！」

突然実君が入ってきた。走ってきたらしく汗をかいていた。

「実君、どうしたの？」

「千春ちゃんを…つれていかなでください！」

「へ？」

実が頭を下げたことよりその言葉に驚いていた。

「あ、あの…東京での話を聞いたり、大船渡のことも…教えて…なあと…思ってまし…何笑ってんですか？」

「いやー、千春のこと好きなのね。」

母が大爆笑しながら言った言葉に千春はぼかんとして実は赤くなった。

「ち、ちがうし！」

「…千春はどうすんの？」

「あ、もう少しここにいたい。」

「よし、じゃあ、実君頼むわね。」

「ッ…。」

両親は仕事のため東京へ戻っていった。

「実君、ありがとう。」

「別にー。」

「さっきの言葉ってどういうこと？」

「…バカ！」

「えー？」

翌日、美緒に言うの大爆笑された。

「美緒ちゃんまで。」

「いや、だって…告白じゃん。」

「告白はないよ。」

「実、どんまい。」

「で、どうすんだ？」

「うーん。」

千春は悩んでいた。学校へ戻るか、ここで暮らすか…。

「千春、早く決めろ。」

「…ん？今、呼びすてした？」

「同い年だからいいべ。」

「…いや、ちよつとドキツとした。」

ゴンツ

「え、実君大丈夫？」

千春の爆弾発言に実はもだえていた。

「お母さん、お父さん私ここに残る。」

「そう、わかった。」

「2人はどうするの？」

「仕事があるからしばらくはあっちね。」

「そっか…。」

少しさびしいと千春は思ったが…

「美緒ちゃんと実君もいるからさびしくないでしょ？」
母がニヤニヤしながら言うのに千春は首をかしげた。

「遠野千春です。」

実や美緒も通っている学校へ行くことになった。

「千春、人気者だね。」

「え、そう？」

千春は自覚はないがモテていた。都会から来たというのと本人がかわいいのとで。

「実、妬いてんの？」

「焼く？何？モチか？」

「ある意味モチだけでも…。」

自覚のない2人にため息をつく美緒だった。

「秘密基地につれてってやる。」

「？」

実は日曜日、千春を秘密基地へ誘った。

「ここだ。」

「…わぁー。」

そこはたくさんさんの椿が生えていた。大船渡は椿の里と言われていた。

「すげえべ？」

「うん、ありがとう。」

「…おう。」

「…で、告白したの？」

「してねえよ。」

「あんた、千春がモテんの知ってんでしょいいの？」

「…。」

「美緒、実お待たせ。」

「…あー急用思い出した。」

「え…おいつ」

2人きりにされた実は千春と帰ることにした。

千春は何となく緊張していた。

「実、あの…。」

「千春ってさ、彼氏いの？」

「え、いないよ。」

「そっか。」

実の横顔がかっこよく見えて、ドキドキした。

「それがどうしたの？」

「あのさ、俺千春といると楽しいんだ。最初は都会人が…とか思ってたけど、今は居たら楽しい。」

「…？」

「だから俺は千春が好きだって言ってるんだよ。」

「本当に？」

「うん。」

「私も実が…どうしたの？」

実が千春の後ろをにらんでいたのでふり返ると美緒

がニヤニヤして見ていた。

「えっ何で？」

「実、おめでとう！」

「美緒ー!!」

実は逃げる美緒を追いかけて、それを千春は笑って見ていた。

そして10年後

「千春、超かわいい。」

「ありがとう、美緒。」

「そろそろですよー。」

「はーい。」

「じゃあ後でね。」

実と千春は結婚することになった。

「千春、私のところにブーケ。」

「えー、がんばっけど…。」

「そうやってつと受け取れねーんだよ。」

「うるさいわよ！」

「いくよ！」

千春にとって大船渡は特別な場所になった。

「実、私幸せだよ。」

そう言う実と千春は手をつなぎ、2人で夕日を見ていた。あの椿の所で…。

黄水仙

千葉 恵保子

東の空が薄っすらと明るんで、恐ろしい夜が明けようとしています。

大津波が去った後も地の底から揺さぶるように一晩中、地震が因（よ）っていました。

水仙の子供は、大津波に襲われたとき、あっ、という間に流され、気がついたときは花壇のコンクリートブロックの隙間にいました。

水仙の子供は、いつも手をつなぎ合っていたお父さんやお母さん、兄姉たちを呼んでみました。

でも、誰からも何の返事ありません。

水仙の子供は頭を上げ、ひとりぼっちの寂しさにほうと、ため息を吐きました。

冷たい風が吹きぬけ、曇（みぞれ）が降ってきました。

水仙の子供の身体の上には、僅（わず）かばかりの土しか被（かぶ）さっていませんでしたので冷たい風が吹き、曇が降ると身体が震えました。

今までは皆と一緒に手を繋いでいたので少しぐらいの寒さは平気でした。でも、今は、ひとりぼっちの寂しさがいつそう、溜息を深くさせるのでした。

そうして何日かが過ぎました。地鳴りのような地震も少しずつおさまり、南風がふくようになりました。

水仙の子供はあの、大津波に襲われた日から、身体中がひりひりと痛み、夜も眠れませんでした。それでも時々、雨や雪が降ったりすると寒い、とは思いましたが、身体の痛みが和らぎました。

もうすぐ、四月になる、好く晴れた日の朝、二、三日前から南風が吹き、水仙の子供は、ほっこりと、土の上に芽を出し、背伸びをしました。身体はひりひりと痛みますが、お日様にあたっていると、ほんの少し、明るい気持ちになりました。

暖かい南風に吹かれていると、駆けてくる小さな足音が聞こえました。

「あつ、お父さん、水仙の花が咲いているよ。」

「おう！よく咲いたね、津波にまけなかったか、がんばったね。」

「偉いね。でも、葉っぱが茶色だよ。」

「ああ、波を被ったからね、潮焼けしたんだね。それに、今にもたおれそうだ。」

二人は東日本大震災の大津波に襲われる前、此处に住んでいたお父さんと小学校三年生の真ちゃんでした。津波から一週間経ち、やっと、道が通れるようになったのです。

家は跡形も無く津波に流され、家が建っていた土台だけが残っていました。

水仙の子供は『あつ、真ちゃんだ！』と思いました。

真ちゃんは優しく、サツカーの大好きな男の子です。いつも、美味しい水をかけてくれました。

お父さんは

「毎年、厳しい冬の寒さを堪えて、春にはきれいな花を咲かせて、楽しませてくれる。今年も頑張るぞって勇気もくれる花たちだ。どんな荒地にも花は咲くものなんだなあ」と言った。

「よしっ、花たちに恩返しだ。『お滝』から水を汲んでこよう！」

真ちゃんは、お父さんの言っている言葉の意味がすぐに分かりました。

去年の五月の「うに」漁の時、真ちゃんがうにを入っていた海水を誤って、花壇にこぼしたことがありました。その時、お父さんが海水の零（こぼ）れた所に何度も水をかけて、海水を洗い流したのです。

東日本大震災の後、いまだに水道も電気も止まったままです。お父さんの工場は山際の高台にあり、工場の脇の川はお滝から流れてきています。

お滝は、お父さんの工場から、少し山奥に入ったところにある滝のことで、地元の人はお滝と言い、日本

名水百選にも選ばれました。

どんな日照りでも、かれたことが無く、震災前も今も、町の人たちにとっては恵みの滝の水でした。

真ちゃんとお父さんは自転車がやつと、通れるようになった瓦礫の道を、何度も往復して水を汲み、工場の裏山の土を発泡スチロールで運んでは、水仙の子供の葉や根を洗い、土を優しくかけてあげました。

「お父さん、瓦礫の下に、水仙の球根があるよ。」

真ちゃんの声にお父さんは

「よし、瓦礫をどけて、球根たちを出してあの子と一緒に植えてあげよう。」

二人は瓦礫の下から球根を取り出すと、やさしく水に浸し、それから工場の脇の土を花壇に入れ替えて子供の水仙と一緒に植えてあげました。

「よし、これで大丈夫だ。沢山、きれいに咲いてくれるぞ。」

「良かったね。明日また、来るからね。」

真ちゃんとお父さんに水仙の子供は、何度も何度も手を振りがとうと言いました。

壊れたコンクリートブロックや屋根瓦や石を積み上げた花壇の中には瓦礫の下から助け出された水仙のお父さんとお母さん、そして兄弟たちが手を取り合っていました。

翌日、真ちゃんとお父さんが家の跡地に行って驚きました。

花壇いっぱいには黄水仙の花が、二人が来るのを待っていたかのように、辺りを黄金色に染めて咲いていたのです。

おわり

第 24 回

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員

委員長 熊 谷 勵

委 員 下河原 シゲ子

委 員 長 澤 敏 之

委 員 村 上 洋 子

第 24 回

さんりく・おおふなとお話大賞入賞作品集

発 行 日 平成 26 年 12 月 18 日

編集・発行 大船渡市立中央公民館

〒022-0003

大船渡市盛町字内ノ目 4 番地 2

TEL 0192-26-3166

FAX 0192-26-5903

